

泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII

泉南市文化財調査報告書 第三十三集

2000. 3

泉南市教育委員会

序 文

泉南市は、大阪府南部に位置し、一年を通して温和な気候条件を有し、海、山、川すべてが備わった豊かな自然環境に恵まれています。この優れた環境の中、人々は古くからこの地で生活を始め、その結果たくさんの遺跡が残され、現在市域には93箇所の遺跡が確認されています。

一方、近年、関西国際空港に代表される様々な開発によって、急激な都市化を遂げ、わたしたちの暮らしを大きく変えることとなりました。しかし他方で、これら開発によって貴重な遺跡が、破壊の危機にさらされていることも少なくありません。

このような状況で、本市におきましては、開発に対応し我々の先祖の残した貴重な文化遺産を後世に伝えるべく、市内遺跡群発掘調査事業を行い、毎年『泉南市遺跡群発掘調査報告書』として公表させて頂いております。本書が、広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすると同時に、そこから垣間見ることのできる先祖の歩みを、市民の皆様が肌で感じて頂けることを願ってやみません。

今後は、昨年度展示室がオープンいたしました埋蔵文化財センター（古代史博物館）を、市内発掘調査事業の拠点として、ソフト、ハード両面でさらなる整備を進め、より一層の質の高い発掘調査を進めて行く所存でございます。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地元土地所有者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々には、深く感謝の意を述べさせていただきますと同時に、今後とも本市文化財行政に、より一層のご理解、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成12年 3月

泉南市教育委員会
教育長 亀田章道

例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成11年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当、実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎、岡田直樹、石橋広和、岡 一彦、城野博文、河田泰之、大野路彦を担当者とし、また事務担当者を西澤順也として、平成11年4月1日に着手し、平成12年3月31日に終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、蔵田弘幸、蒲生徹幸をはじめ、伊藤由紀、植田あゆ美、江尻美代子、奥田桂、片木直幸、久我実希恵、熊田敬子、島津真理、富愛、藤野渉、福井元気、松本真規子、真鍋紀美子、向林智与諸君らの協力を得た。
また、広瀬和雄、向井俊生、芝野圭之助らの各氏からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は、石橋、岡、城野、大野が行ない、執筆の分担は目次に記した。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行ない、出土遺物の写真撮影は石橋、城野が行なった。
6. 遺物実測は江尻美代子、真鍋紀美子が行ない、トレースは江尻が行なった。図版、挿図作成は主に城野が行なったが、一部伊藤由紀、江尻美代子、島津真理の協力を得た。
7. 本書の編集は城野が中心となり行なったが、一部仮屋、石橋が補佐した。
8. 調査にあたっては、写真・スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。
9. 本調査における出土遺物及び諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1. 各調査区には、個別の番号をつけている。番号の基本構成は、「遺跡略称（記号）－年度－通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡－ON、幡代遺跡－HT、岡中遺跡－OK、北野遺跡－KT、上村遺跡－KM、岡田遺跡－OKD、兎田遺跡－US である。調査年度をあらわす場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現した。

なお本報告書では、報告文は遺跡毎に章だてしているため、基本的に各章中では遺跡名称を省略している。

2. 図中の方位は、PL. 1・2では真北を、各調査区位置図・地形図及びPL. 3では座標北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。

3. 本文および図版中に示したレベル高は、すべてT.P.+(m)の数値を使用しているが、T.P.+は省略している。

4. 遺構名称は、アルファベットと任意の数列の組合せで表している。アルファベットは、SD－溝、SK－土坑、SX－性格不明遺構、Pit－柱穴をそれぞれ表す。遺構番号は、2桁を原則として、1桁の数字の場合は、その前に0を付している。また、調査区毎に、遺構の種類別に通し番号を付している。

5. 断面図および立面図の位置は、平面図中に指示線とアルファベットによって示され、その場所が一致する。

6. 遺物実測図では、断面の表示を便宜上、弥生土器・土師器－白抜き、瓦器・瓦質土器－トーン、石器・石材、瓦－斜線のように塗り分けた。

7. 出土遺物の番号は、遺跡毎に土器、瓦の区別無しに通し番号を付した。なお、遺物実測図と写真図版では、遺物番号は統一している。

8. 遺物の出土量を表すのに用いたコンテナは、容積約27.5ℓのものである。

目 次

第1章 調査の経過	(石橋)	1
第2章 男里遺跡の調査		6
第1節 既往の調査	(城野)	6
第2節 99-1区の調査	(城野)	7
第3節 99-2区の調査	(城野)	9
第4節 99-3区の調査	(城野)	10
第5節 99-4区の調査	(城野)	12
第6節 99-5区の調査	(岡)	15
第7節 99-6区の調査	(城野)	16
第8節 98-7区の調査	(岡)	17
第9節 98-8区の調査	(城野)	18
第3章 幡代遺跡の調査	(城野)	20
第1節 既往の調査		20
第2節 98-1区の調査		20
第4章 岡中遺跡の調査		22
第1節 既往の調査	(城野)	22
第2節 99-1区の調査	(大野)	22
第3節 99-2区の調査	(岡)	23
第5章 北野遺跡の調査		25
第1節 既往の調査	(大野)	25
第2節 99-1区の調査	(岡)	26
第3節 99-2区の調査	(大野)	26
第6章 上村遺跡の調査	(石橋)	28
第1節 既往の調査		28
第2節 99-1区の調査		28
第7章 岡田遺跡の調査		30
第1節 既往の調査	(岡)	30
第2節 99-1区の調査	(岡)	31
第3節 99-2区の調査	(岡)	31
第4節 99-3区の調査	(石橋)	32
第5節 99-4区の調査	(岡)	33
第6節 98-1区の調査	(大野)	32
第7節 98-2区の調査	(城野)	34
第8節 98-3区の調査	(城野)	34
第8章 兎田遺跡の調査	(城野)	36

第1節 既往の調査	36
第2節 98-1区の調査	36
第9章 まとめ	(城野) 38
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図 男里遺跡99-1区地形図	7
第2図 男里遺跡99-1出土の石器・石材	8
第3図 男里遺跡99-2、98-8区地形図	9
第4図 男里遺跡99-3区地形図	10
第5図 男里遺跡99-3区出土の土器	11
第6図 男里遺跡99-4区地形図	12
第7図 男里遺跡99-4区出土の軒瓦・道具瓦	14
第8図 男里遺跡99-5区地形図	15
第9図 男里遺跡99-6区地形図	16
第10図 男里遺跡99-1・4・6区出土の土器	16
第11図 男里遺跡98-7区地形図	18
第12図 幡代遺跡調査区位置図	20
第13図 幡代遺跡98-1区地形図	21
第14図 岡中遺跡調査区位置図	22
第15図 岡中遺跡99-1・2区地形図	23
第16図 北野遺跡調査区位置図	25
第17図 北野遺跡99-1・3区地形図	25
第18図 北野遺跡99-2区地形図	26
第19図 上村遺跡調査区位置図	28
第20図 上村遺跡99-1区地形図	29
第21図 岡田遺跡調査区位置図	30
第22図 岡田遺跡99-1・2区地形図	31
第23図 岡田遺跡99-3・4区、98-2・3区地形図	32
第24図 岡田遺跡98-1区地形図	33
第25図 兎田遺跡調査区位置図	36
第26図 兎田遺跡98-1区地形図	36

表 目 次

第1表	平成11年度発掘および試掘調査届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	4
第4表	立会調査一覧表	5
第5表	文化財一覧表	41

図 版 目 次

P L . 1	泉南地域の文化財
P L . 2	泉南地域の地形分類
P L . 3	男里遺跡調査区位置図
P L . 4	男里遺跡調査区①
P L . 5	男里遺跡②・幡代遺跡・岡中遺跡・北野遺跡・上村遺跡調査区
P L . 6	岡田遺跡・兎田遺跡調査区
P L . 7	男里遺跡99-1・2区
P L . 8	男里遺跡99-3・4・5区
P L . 9	男里遺跡99-6区・98-7区
P L . 10	男里遺跡98-8区・幡代遺跡98-1区・岡中遺跡99-1区
P L . 11	岡中遺跡99-2区・北野遺跡99-1・2区
P L . 12	上村遺跡99-1区・岡田遺跡99-1・2区
P L . 13	岡田遺跡99-3・4区・98-1区
P L . 14	岡田遺跡98-2・3区・兎田遺跡98-1区
P L . 15	男里遺跡99-3区出土の土器①
P L . 16	男里遺跡99-3区出土の土器②
P L . 17	男里遺跡99-1・4区出土の遺物
P L . 18	男里遺跡99-1・4・6区出土の遺物

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XVII

第1章 調査の経過

大阪府南部に位置する泉南市は、北を大阪湾、南を和泉山脈、東西を檜井川、男里川に囲まれており山間部から段丘面、沖積地、海岸などすべての地形的条件を備えており、旧石器時代から近世に至る様々な遺跡が残されている。これらが徐々に周知されたのは、本市において本格的な開発が始まる関西国際空港建設構想の具体化する頃からである。この後、バブル景気ともあいまって空港開港前後は、市域の開発は急激に増大し、調査件数も一挙に増加し様々な成果が得られることとなった。バブル経済崩壊以降、特にここ1～2年は、調査件数共に頭打ちもしくは減少傾向が続いていたが、今年度は届出等の件数も再び増加に転じ、確実に下げ止まりの感がある。さらに来年度以降は、今年度着工した関西国際空港の2期工事の進展にともないさらに増加する可能性もある。

このような状況下、今年度本市において第2表のとおり発掘調査が行なわれた。このうち本書の本文中において報告する遺跡数は全部で7遺跡、調査件数は昨年度未報告分を含め22件となっている。昨年同様、ほとんどの調査が小規模なものとなっており、今年度もこの傾向が依然として続いているといえるだろう。

以下、それぞれの遺跡について調査の経過と概要をみてみたい。

男里遺跡は、市域における最大の遺跡で、毎年多くの調査が行なわれ、最も成果の上がっている遺跡の一つである。今年度も最も多くの調査が行なわれることとなり、昨年度未報告分を合わせて8件の調査を報告している。昨年度はやや減少傾向にあったが、今年度は再び増加に転じ、特に現在の男里集落の縁辺部や遺跡南部の調査で成果があった。

幡代遺跡は、男里遺跡と同様に古くから周知され、毎年一定の調査が行なわれ続けていた。しかし、これらのほとんどは、現在の幡代集落とその周辺の小規模な調査がほとんどであり、男里遺跡ほどの遺跡の内容は解明されていない。今年度は、調査は行なわれなかったが、昨年度未報告分の1件の調査を収録している。

岡中遺跡は、現在の岡中集落を中心とした遺跡である。集落部分において住宅の建て直しを主に1～2年おきに数件ずつではあるが着実に調査が行なわれている。今年度も現在の岡中集落内部で2件の調査が行なわれ、これらを報告している。

北野遺跡も周知されたのは古く、昭和50年代後半においてすでに調査が行われていた。昭和60年代頃までは比較的多くの調査が行われていたが、ここ数年はまったく行われていなかった。今年度は、久々に比較的規模の大きな調査を含め3件もの調査が行われ、本書ではこのうち2件について報告している。

上村遺跡は、平成元年から2年度にかけて行なわれた市域における大規模な分布調査によって周知された遺跡の一つである。現在の新家上村集落の北東の水田内に位置するため、これまで全く調査は行われなかった。しかし、昨年頃から新家駅周辺の水田の宅地化が急激に進んでおり、本遺跡においても、その一連の動きの中で初めて調査が行われることとなった。

岡田遺跡は、男里遺跡に次ぐ面積を持ち、同時に調査件数も男里遺跡に次ぐ遺跡である。特にこの2～3年は、岡田地区でも水田の宅地化が進むに伴い調査件数が急増している。今年度の調査は、遺跡北東部の南海本線岡田浦駅に近い地域に集中した。

兎田遺跡は、遺跡の大半が現在の兎田集落と重なっており、これまである程度の調査が行われているにもかかわらずほとんど全容は知られていない。本報告においては、現集落の内の住宅の立て替えに伴う昨年度未報告分1件の調査のみとなった。

第1表 平成11年度発掘および試掘調査届出一覧表

平成11年12月31日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面積(m ²)	件 数	面積(m ²)	件 数	面積(m ²)
11年・1	5	1,035.20	4	3,549.39	8	4,584.59
2	4	1,727.31	2	2,612.80	6	4,340.11
3	4	2,177.09	2	1,457.24	6	3,634.33
4	4	1,205.01	0	0.00	4	1,205.01
5	4	2,317.288	4	9,007.30	8	11,324.588
6	4	5,112.21	5	13,762.01	9	18,874.22
7	3	275.02	7	9,986.51	10	10,261.53
8	5	31,038.07	3	8,692.17	8	39,730.24
9	6	4,514.23	2	17,684.465	8	22,198.695
10	10	2,479.48	1	56,220.56	11	58,700.04
11	5	562.08	3	8,192.78	8	8,754.80
12	3	2,717.390	0	0.00	3	2,717.390
合 計	56	55,160.378	33	132,238.495	89	187,398.873

第2表 発掘調査一覧表

平成11年12月31日現在

No.	遺跡名	地区名	位 置	申 請 者	面積(m ²)	用 途	調査年月	備 考
1	男里遺跡	99-1区	男里		348.18	住宅新築	11年9月	本書掲載
2	男里遺跡	99-2区	男里		480.86	宅地造成	11年10月	同上
3	男里遺跡	99-3区	男里		1,452.55	工場及び住居	11年7月	同上
4	男里遺跡	99-4区	馬場		552.30	長屋住宅	11年4月	同上
5	男里遺跡	99-5区	馬場		179.93	長屋住宅	11年10月	同上
6	男里遺跡	99-6区	樽井		265.99	住宅新築	11年4月	同上
7	男里遺跡	99-7区	男里		130.00	農業関連	11年11月～	現在継続中
8	男里遺跡	99-8区	男里		409.00	道路	11年12月～	同上
9	男里遺跡	98-5区	男里		442.00	農業関連	11年1月～ 11年3月	別書掲載
10	男里遺跡	98-6区	男里		222.50	道路	10年11月～ 11年1月	同上
11	男里遺跡	98-7区	男里		497.11	住宅新築	11年1月	本書掲載
12	男里遺跡	98-8区	男里		319.49	住宅新築	11年1月	同上
13	幡代遺跡	98-1区	幡代		159.42	農業用倉庫	11年2月	同上
14	岡中遺跡	99-1区	信達岡中		283.98	住宅新築	11年8月	同上
15	岡中遺跡	99-2区	信達岡中		280.82	住宅新築	11年7月	同上
16	北野遺跡	99-1区	信達六苗代		196.69	住宅新築	11年6月	同上
17	北野遺跡	99-2区	信達六苗代		616.95	住宅新築	11年10月	同上
18	北野遺跡	99-3区	信達六苗代		4,821.49	遊技場	11年9月	別書掲載
19	上村遺跡	99-1区	新家		1,714.40	分譲住宅	11年12月	本書掲載
20	岡田遺跡	99-1区	岡田		136.77	住宅新築	11年11月	同上
21	岡田遺跡	99-2区	岡田		405.01	住宅新築	11年5月	同上
22	岡田遺跡	99-3区	岡田		103.01	住宅新築	11年5月	同上
23	岡田遺跡	99-4区	岡田		225.98	住宅新築	11年9月	同上
24	岡田遺跡	98-1区	岡田		328.21	住宅新築	11年1月	同上
25	岡田遺跡	98-2区	岡田		228.08	住宅新築	11年3月	同上
26	岡田遺跡	98-3区	岡田		226.16	住宅新築	11年3月	同上
27	兎田遺跡	98-1区	兎田		583.95	住宅新築	11年3月	同上

第3表 試掘調査一覧表

平成11年12月31日現在

No	遺跡名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月日	備 考
1	範囲外	信達市場		483.55	宅地造成	11年 1月18日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	岡田		659.57	医院	11年 1月27日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	樽井		2,154.69	宅地造成	11年 2月15日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	男里		529.96	分譲住宅	11年 5月 6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	新家		927.28	共同住宅	11年 5月19日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	馬場		2,949.45	病院	11年 5月28日	トレンチ4カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	信達六尾		1,605.13	工場	11年 7月 7日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	信達市場		2,385.18	宅地造成	11年 7月 9日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	新家		2,193.26	分譲住宅	11年 7月12日	トレンチ4カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	樽井		1,885.18	分譲住宅	11年 7月13日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	新家		1,073.26	共同住宅	11年 7月16日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	信達市場		7,443.25	宅地造成	11年 7月21日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	新家		703.37	分譲住宅	11年 7月29日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	樽井		654.93	共同住宅	11年 8月 3日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	信達市場		2,443.29	分譲住宅	11年 8月 9日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	樽井		919.09	分譲住宅	11年 8月23日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	信達大苗代 信達市場		6,653.05	宅地造成	11年 8月31日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
18	範囲外	信達牧野		1,120.03	宅地造成	11年 9月17日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
19	範囲外	新家		2,316.61	分譲住宅	11年 9月30日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範囲外	樽井		2,242.94	宅地造成	11年11月 2日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範囲外	男里		1,118.27	宅地造成	11年11月10日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
22	範囲外	新家		2,950.00	宅地造成	11年11月25日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成11年12月31日現在

No	遺跡名	位置	申請者	面積(m ²)	用途	調査年月日	備考
1	男里遺跡 光平寺跡	男里		303.00	下水道	10年12月～11年4月	中～近世の遺物を採集した。
2	光平寺跡	男里		104.00	住宅新築	11年1月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	光平寺跡	男里		100.01	住宅新築	11年1月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	光平寺跡	男里		100.01	住宅新築	11年1月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	光平寺跡	男里		100.01	住宅新築	11年1月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	光平寺跡	男里		100.49	住宅新築	11年1月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	岡田西遺跡	岡田		80.00	農業関連	11年1月19日～ 1月22日	中世の包含層を確認した。
8	位井上池	信達町中		510.00	農業関連	11年1月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	菅谷池	信達市場		430.00	農業関連	11年2月4日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	海宮宮池	信達大苗代		1,000.00	農業関連	11年2月17日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	男里遺跡	男里		200.00	下水道	11年3月	中世～近世の遺物を採集した。
12	男里遺跡	男里		105.00	農業関連	11年3月5日～11日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	光平寺跡	男里		100.01	住宅新築	11年3月9日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	男里遺跡	男里		178.00	下水道	11年3月	遺構・遺物は確認されなかった。
15	高田山古墳群	幡代		423.63	住宅新築	11年3月23日	遺構・遺物は確認されなかった。
16	男里遺跡 光平寺跡	男里		155.00	下水道	11年3月～4月	遺構・遺物は確認されなかった。
17	光平寺跡	男里		100.02	住宅新築	11年5月12日	遺構・遺物は確認されなかった。
18	光平寺跡	男里		100.02	住宅新築	11年5月12日	遺構・遺物は確認されなかった。
19	光平寺跡	男里		100.01	住宅新築	11年5月12日	遺構・遺物は確認されなかった。
20	光平寺跡	男里		100.01	住宅新築	11年6月11日	遺構・遺物は確認されなかった。
21	光平寺跡	男里		103.99	住宅新築	11年7月8日	遺構・遺物は確認されなかった。
22	光平寺跡	男里		100.72	住宅新築	11年7月19日	遺構・遺物は確認されなかった。
23	高田山古墳群	幡代		235.84	住宅新築	11年7月19日	遺構・遺物は確認されなかった。
24	根来街道	樽井		75.00	道路	11年8月26日	遺構・遺物は確認されなかった。
25	光平寺跡	男里		100.01	住宅新築	11年9月6日	遺構・遺物は確認されなかった。
26	光平寺跡	男里		100.01	住宅新築	11年9月6日	遺構・遺物は確認されなかった。
27	男里遺跡	樽井		479.93	店舗	11年10月8日	遺構・遺物は確認されなかった。
28	光平寺跡	男里		100.01	住宅新築	11年10月25日	遺構・遺物は確認されなかった。
29	睦ノ谷池	新家		22.00	農業関連	11年12月8日	遺構・遺物は確認されなかった。
30	光平寺跡	男里		100.01	住宅新築	11年12月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
31	光平寺跡	男里		100.01	住宅新築	11年12月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
32	菅谷池	信達市場		1,200.00	住宅新築	11年12月15日	遺構・遺物は確認されなかった。

第2章 男里遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1～3)

男里遺跡は市域の西端を限る男里川右岸に立地する、市域では最大の面積を有する遺跡である。遺跡の南端から西端に沿うように男里川が北上し、東側には基盤山地より舌状に伸びる丘陵が迫る。現在遺跡の西端、男里川によって形成された自然堤防上に男里集落が営まれ、東端の丘陵裾、沖積段丘面上には馬場集落が存在する。それら集落の間には旧河道や氾濫原、谷底低地などが広がるが、それらは専ら開墾され、耕作地として供されている。

今日までに得られた調査成果に基き、以下に遺跡の概略を述べる。

縄紋時代以前 遺跡の中央に位置する双子下池において採集されたナイフ形石器がある^①。詳細は不明であるが、周辺に関連遺跡の存在を期待させるものである。

縄紋時代 晩期に属する資料が得られている。北西部の氾濫原及び谷底低地上において滋賀里Ⅲ～Ⅳ式に属する土器がまとまって出土している^②。また双子池よりやや北上した地点においてピット群とともに晩期の系譜を引く突帯紋土器が数多く出土するなど、遺跡の中央部北側を中心に展開していたものと考えられる。

弥生時代 前期に属する遺構はあまり知られていない。前代に引き続き遺跡の北側に若干の遺物が見られる程度である。先の突帯紋土器群に供伴してわずかに前期に属する資料もある^④。中期中葉には遺跡の中央から南半部の沖積地に集落が営まれている^⑤。その規模から地域の中心的な集落であったと考えられ、南東方向に約2 km離れた経塚山山中より発見された林昌寺銅鐸などとの関連が注目される^⑥。また近年は遺物の認められる範囲がさらに南北両方向に拡大する傾向にあり、周辺に小規模な集落が複数展開していた可能性もある。しかしこれらの集落の存続は短期間に限られ、中期後葉には確認される遺構、遺物が極端に減少するのである。やや降って後期後半から庄内式併行期にかけては、再び双子池の周辺において遺構や遺物が多く確認されている。明確な遺構は少なく実態は明らかでないが、近隣に集落等が存在する可能性は高い。

古墳時代 双子下池内において、庄内式併行期から布留式期に属する多量の遺物を含む旧河道が確認された^⑧。また現在の男里集落のほぼ中央部においても庄内期のベース面が確認されており^⑨、遺跡の北西側に活動の中心が求められる。5世紀後半代の遺物を含む砂礫層が確認されており^⑩、やや降って6世紀代には前代と大きな変化は窺えないものの、最近の北西端部における調査では6世紀代の竪穴住居などが確認されており^⑪、より北側に活動範囲が広がる可能性がある。

古代 双子池より東北東に約200mの地点から飛鳥時代の竪穴住居と掘立柱建物が隣接して確認されている^⑫。また双子上池の北西隅に隣接して奈良時代の掘立柱建物が検出されている^⑬。双子下池内においては飛鳥～奈良時代にかけての遺物を多量に含む河道が検出されており、この河道の両岸に集落が展開していた可能性がある。また河道の北端部では「しがらみ」が確認されている^⑭。

平安時代には遺跡の中央部に加えて、北東部においても掘立柱建物などが確認される^⑮。この集落は北側に隣接する戎畑遺跡で確認された灌漑用大溝との関連で注目されるものである^⑯。

また平安時代末から中世には、現在も法灯を伝える光平寺や、また双子池の南東方向の広い範囲で瓦

が出土する。いずれも実態は明らかではないが、平安時代末以降に多くの寺院が建立される泉州地域の地域性を反映しているものといえよう。なお現在も光平寺境内に安置される正平24（1369）年銘の石造五輪塔は男里集落の北方に明治年間まで存在した宝蓮寺にもとあったと伝えられるものである^⑰。

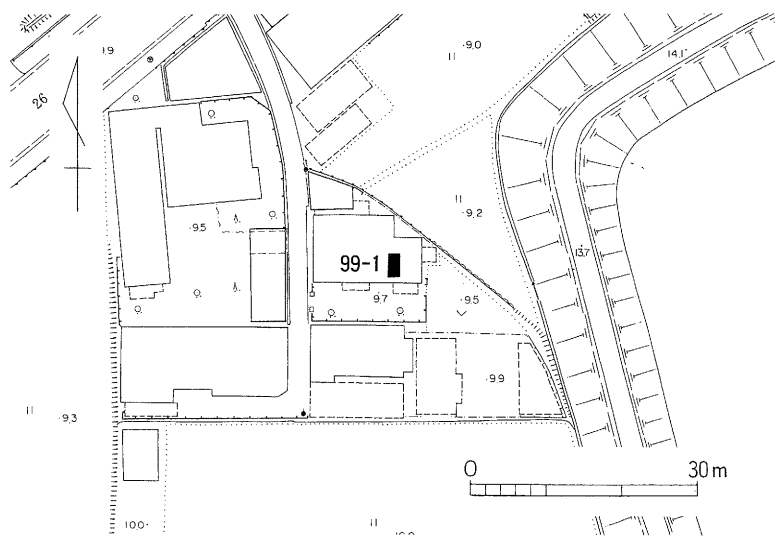
中世 中世になると遺跡内の各所より遺構、遺物が確認され、飛躍的な活動範囲の拡大が窺える。特に14～15世紀以降になると生産域と集落域の明確な区別がなされ、遺跡内では男里川右岸の自然堤防上などに集落が展開し、以降今日に至るまで「集村」と呼ばれる集落形態が連綿と踏襲されている。これは灌漑能力の向上などに伴い、土地利用の集約がはかられ、より効率的な耕地経営を実践する働きがあったものと考えられる。また同じく14世紀以降には土師質の真蛸壺や土錘などの漁労具が随所より出土するようになり、特に最近の調査では当遺跡をはじめ、近隣の戎畑遺跡や樽井南遺跡、泉佐野市や阪南市などで同様の真蛸壺焼成坑が数多く確認されている^⑱。これらは当時普遍的に存在した大阪南部沿岸の地域的な特徴として考えられようか。それら蛸壺焼成坑の在り方からは、専門的に蛸壺の生産を行っていたとは考えにくく、集落を単位として、農閑期などに合同で必要な蛸壺の生産を行っていたものと考えたい。

近世 近世以降には土地利用に関して大きく変動する様子は認められない。基本的に前代を踏襲し発展するようである。遺跡内では現在の男里や馬場の集落が、すなわち中世から近世の集落域と基本的に重複していることが確認されている。注目されるのは近世後半に属する製糖に関する遺物が顕著に確認されることで、同様の遺物は幡代遺跡や光平寺跡などにおいても確認されている^⑲。前代の蛸壺漁と同様、地域的な特徴として捉えられよう。

第2節 99-1区の調査

1. 位置（P.L. 3、第1図）

調査地は遺跡の中央部、旧河道の痕跡とされる双子池下池の北西隅より西側に約20mの地点である。地形分類上では旧河道または氾濫原及び谷底低地に属する。周辺の調査では、調査区の東隣の地点において比較的安定した地山面が確認され、14世紀代のピット群が確認されている^⑳。また北東へ約10mの地点では旧河道と考えられる大規模な流路が確認され、埋土より奈良時代の遺物が多く出土している。トレンチは1カ所設定した。



第1図 男里遺跡99-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 4・7）

確認された土層は基本的に4層ある。Ⅰ層・橙色混じり明灰褐色土（約20cm・現代の床土）、Ⅱ層・暗褐色混じり淡灰褐色土（約25cm）、Ⅲ層・暗褐色粘質土（約30cm）の3層がいずれも水平堆積を呈し、地山である暗黄褐色粘質土に至る。Ⅱ層より中世の須恵器が、またⅢ層より弥生時代の遺物が多く出土した。地山面の標高は8.90～9.10mを測り、南から北へ緩やかにレベルを下げている。地山上面において遺構が確認された。

3. 遺構 (PL. 4・7)

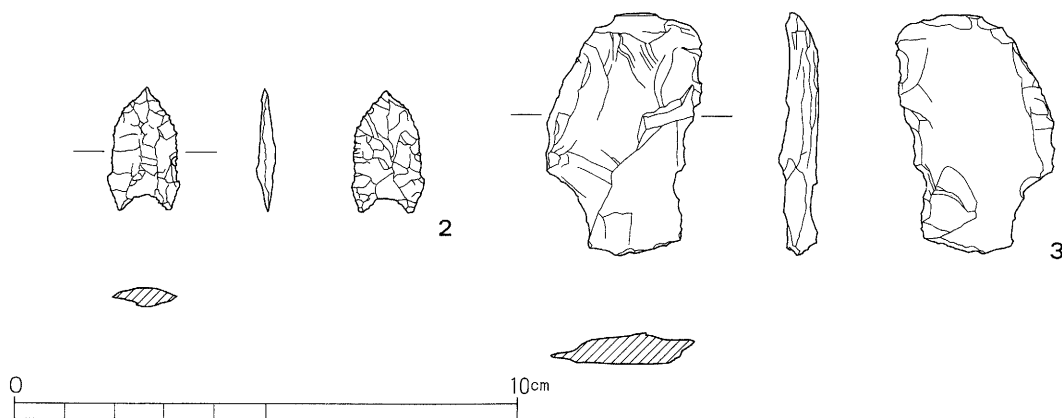
確認された遺構は溝1条、ピット4基である。溝はトレンチの南端部において確認された。平面的にはわずかに西側に向かって幅を狭めながら、東西方向に直線的に進み両端をトレンチ外へと伸ばす。幅30～40cm、検出長1.50m、確認面からの深さ10cmを測る。断面形状は口の開いた皿形を呈する。埋土は1層であり、暗黄褐色土のブロックを多く含む暗褐色粘質土である。埋土より土器のほか石鏃などが出土した。

ピットは溝の東端部を切るPit01が最も大きく、径36cm、深さ45cmを測る。平面形状はややいびつな円形を呈する。Pit02はトレンチの北西隅部において確認されたもので、その西半はトレンチ外へと拡がる。径20cm、深さ15cmを測り、平面的には東西方向に軸を向けた楕円形を呈するものと考えられる。Pit03及び04はトレンチの北東隅で確認された。Pit03はPit04に切られているため、全形は明らかでないが、径20cm、深さ2cm程の小規模なものである。Pit04は南北方向に軸を向けたいびつな楕円形を呈しており、径20～45cm、深さ25cmを測る。ピットの埋土はいずれも1層であり暗黄褐色土のブロックを多く含む暗褐色粘質土である。これらのうちPit03を除いて遺物が出土した。

4. 遺物 (PL. 17・18、第2・10図)

出土した遺物は細片が多く、そのため図化できたものは以下の3点であった。1はⅢ層より出土し、2および3はSD01より出土した。

1は土師器高杯の口縁部である。体部と口縁部との間に明瞭な稜線を持ち、口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がるものである。内外面共にミガキが施されるが、摩滅のため詳細は不明である。復元口径17.7cmを測る。



第2図 男里遺跡99-1区出土の石器・石材

2は凹基無頸式の石鏃である。全体に風化し、また側辺がわずかに欠損しているがほぼ完形である。平面形状は縦長で緩やかに内湾する腹部からかえり状に腰の張る段を介し、脚部は直線的に内傾し先を尖らせる。基部の扱りは浅い台形を呈する。断面形状は扁平な菱形を呈する。側辺は鋸歯状剥離によって形成される。全長1.45cm、最大幅1.50cm、最大厚0.35cm、重量0.99gを測る。石材はサヌカイトである。3はサヌカイトの剥片である。片面に原礫面を残すもので、剥離痕も比較的大きなものが多い。全長4.75cm、最大幅2.9cm、最大厚0.8cm、重量10.21gを測る。

第3節 99-2区の調査

1. 位置 (PL. 3、第3図)

調査区は府道堺阪南線「男里川」交差点より北西へ約20m進んだ地点である。現在の男里集落のほぼ南西端に位置し、現在の光平寺境内からは北西に約100mの距離にある。周辺の調査では近世に属する遺構や遺物が比較的多く確認されている。地形分類上は男里川右岸に発達した自然堤防または氾濫原及び谷底低地に属するものと考えられる。トレンチは2ヶ所設定した。東側を第1トレンチ、西側のものを第2トレンチと呼称する。



第3図 男里遺跡99-2区、98-2区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4・7)

基本的な層序は両トレンチ共に近似するが、若干の差異も認められる。

第1トレンチでは約70cm程の盛土を除去すると、現代の耕作土である暗灰色土(約20cm)が現れる。続いてⅡ層・暗橙色混じり淡灰褐色土(約10cm)、Ⅲ層・淡灰褐色混じり暗褐色土(約5cm)、Ⅳ層・淡黄灰褐色粘質土(約40cm)、Ⅴ層・灰褐色混じり淡黄褐色粘質土(約10~30cm)、Ⅵ層・淡黄褐色粘質土と続く。これらのうちⅣ層及びⅤ層については非常に均質な土質を持つことや、西側から人為的に埋め立てた様子が看取されることから整地層と捉えられるものである。また断面観察によるとこれら整地層の上面には、鋤溝などの耕作痕と考えられる遺構が認められることから、耕地化に伴う整地業と捉えることもできる。Ⅵ層の上面において遺構が確認された。

第2トレンチではⅡ層直下に旧耕作土と捉えられる淡灰褐色土(約15cm)が広がっており、またⅣ・Ⅴ層よりなる整地層も約60cmと厚くなっている。Ⅴ層直下に地山である暗灰褐色砂礫が広がっており、第1トレンチで認められるⅥ層は存在しなかった。

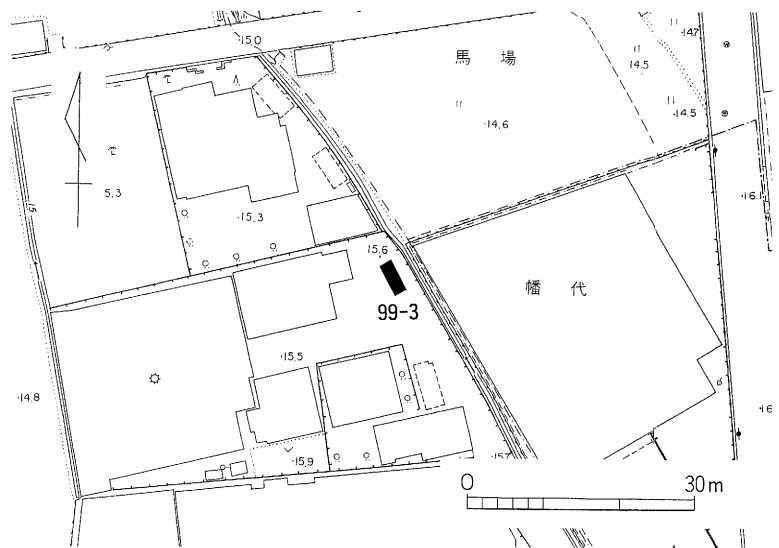
3. 遺構 (PL. 4・7)

遺構が確認されたのは第1トレンチのみである。確認された遺構はピット1基である。ピットはトレンチの南東隅で確認されたため、全形は明らかでない。規模は径25cm、確認面からの深さ10cmを測る。埋土は1層であり淡暗褐色土である。遺物は出土しなかった。また明確な遺構ではないが、トレンチの北東部では20×40cm程の範囲が赤く酸化していた。一部を断ち割り、下部の状況を確認したが、酸化しているのは上面にのみ限られ、強く炎を受けた印象は得られなかった。またその西側約20cmのところには30×60cmの範囲で炭が多く散布していた。いずれも堀方などは全く認められず、何らかの構造を有するものとは考えにくい。野焼き等の痕跡であろうか。

第4節 99-3区の調査

1. 位置 (PL. 3, 第4図)

調査区は遺跡の南部に位置し、双子池から南東へ約500mの地点である。調査区の東側には、近年府道泉佐野岩出線が敷設されている。この府道に伴う発掘調査では、今回の調査区より北と東へそれぞれ約70mの範囲において弥生時代中期の集落が確認され、最も調査区に近接する地点では同時期の大規模な自然流路が確認されている。地形分類上は男里川右岸に発達した沖積段丘面に属するものと考えられる。



第4図 男里遺跡99-3区地形図

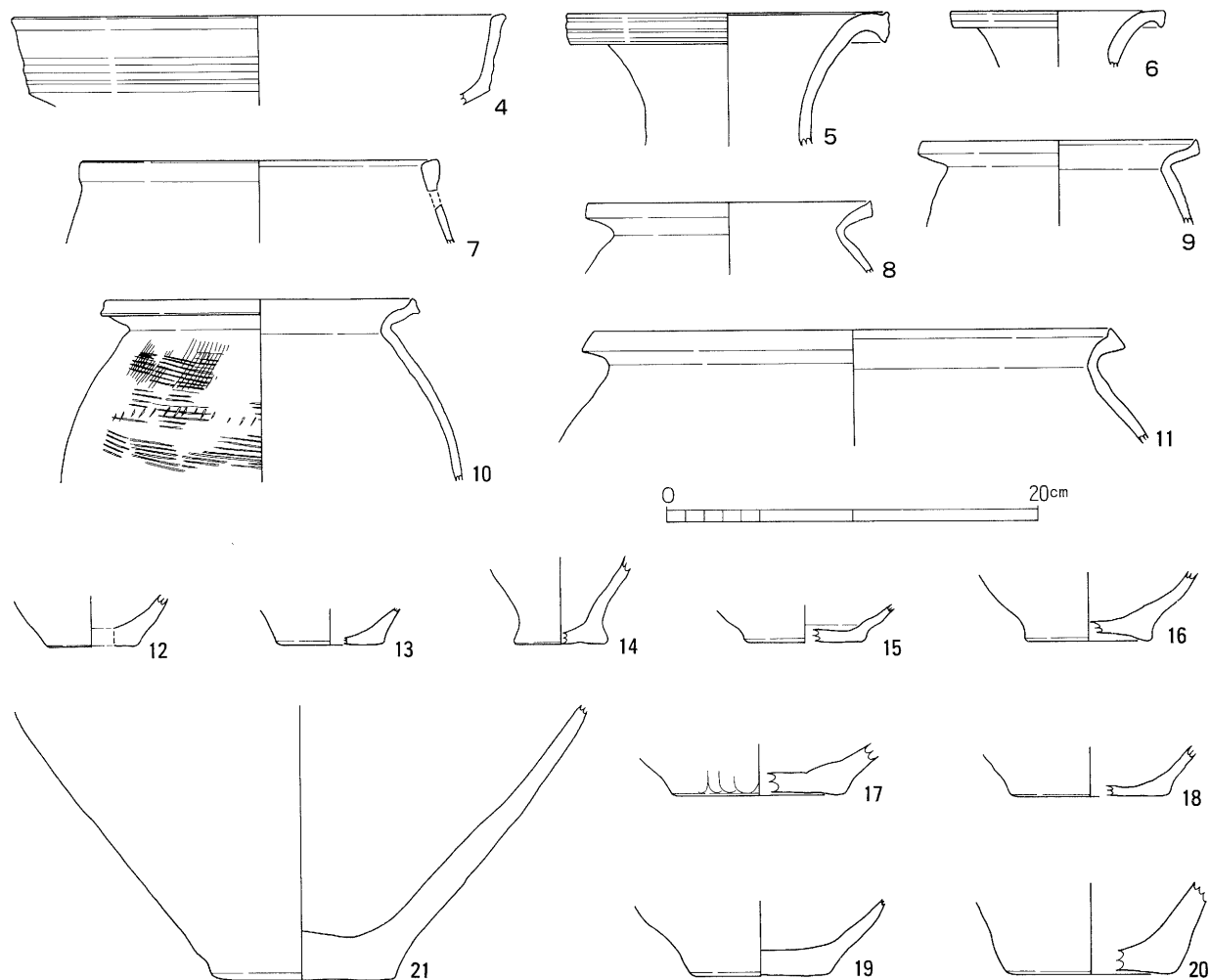
トレンチは1ヶ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4・8)

約1.6cmの盛土を除去すると、現代の耕作土である暗灰色土(約30cm)と、それに伴う床土である灰色混じり暗橙色粘質土(約15cm)がほぼ水平に堆積している。さらにⅢ層・淡黄褐色混じり暗灰褐色土(約20cm)、Ⅳ層・灰褐色混じり暗黄褐色粘質土(約25cm)、Ⅴ層・暗褐色混じり淡灰黄色砂質土(約40cm)の3層が西から東へ傾斜を持って堆積しており、さらにⅥ層・暗黄褐色土へと続く。断面観察ながらⅣ層上面においてⅢ層を埋土とする遺構が確認された。周辺の調査結果から考えて中世に属する耕作に関するものと考えて差し支えないものであろう。またⅤ層より多くの遺物が出土した。Ⅵ層の上面において遺構が確認された。

3. 遺構 (PL. 4・8)

確認された遺構は巨大な落ち込みであり、自然流路と捉えることができるものである。流路はⅥ層を基盤とするものと考えられるが、トレンチの大半が流路に含まれており、Ⅵ層はトレンチの北西隅にわずかに確認されたのみである。よって詳細は明らかでない。流路の埋土は灰白色砂礫であり、弥生時代



第5図 男里遺跡99-3区出土の土器

の遺物を含む。

この流路は先述した当調査区の東隣の地点より確認されている自然流路と一連のものと考えられる。また昨年度実施された双子池下池の調査においても弥生時代中期の自然流路が確認されていることから、今回確認された流路が北西方向にさらに進み、双子池にまで達する可能性が高い。

4. 遺物 (PL. 15・16、第5図)

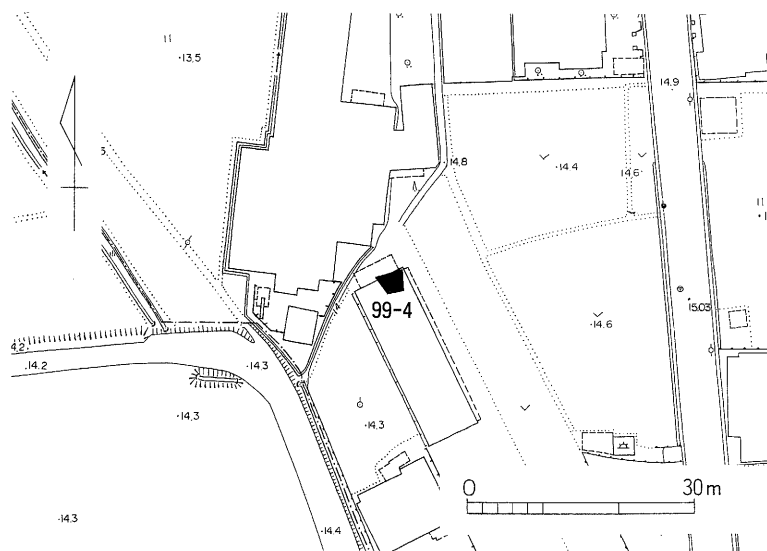
流路埋土である灰白色砂礫層よりコンテナ1箱分の遺物が出土している。総じて細片が多く、また摩滅も激しいため、確認される器種には限りがあった。図示した遺物のうち4～7は壺、8～11は甕、11～21は壺または甕の底部である。

4は広口壺の口縁部である。頸部から明確な稜をなし、直線的に立ち上がるもので、口縁端部は明確な面をなさない。外面には3条の凹線紋が施される。5、6は広口短頸壺であり、6についてはやや小形の製品である。いずれも頸部より緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁端部は垂下するものである。口縁端部にはそれぞれ1～3条の凹線紋が施される。7は広口無形壺である。口縁端部は肥厚し、端部内面には緩やかな面を持つものである。口縁端部直下に穿孔が認められる。甕には口径15cm前後を測る製品(8～10)と、25cmを越える製品(11)がある。いずれも頸部から「く」字状に屈曲し立ち上がる口縁部を持ち、そのうち9と11は口縁端部が上方に拡張され緩やかな平坦面を持つ。また8は口縁端部が肥厚し、断面が二等辺三角形を呈する。10の外面は左上がりのタタキ痕をハケ目調整によって消す。また肩部下方にはヘラ描き刺突紋が施される。底部には底部径5～6cm前後の製品(12～16、19)と底部径が8～9cm前後の製品(17・18、20・21)がある。形状はいわゆる平底を呈するものが多いが、16のように底部中央を窪ませたものや、端部が「ハ」字状に開くもの(14)などがある。このうち12には底部中央からやや片側に寄った位置に穿孔が認められる。

第5節 99—4区の調査

1. 位置 (PL. 3、第6図)

調査区は遺跡の南部に位置し、99—3区とは府道を隔てて北へ約150mの距離にある。前節でも述べたように、当調査区の南西側を中心として弥生時代中期の集落が確認されており、今回の調査においても同時期の遺構の北東方向への拡がりも追求されることが期待された。地形分類上は沖積段丘面上に立地しているものと考えられる。トレンチは1カ所を設定した。



第6図 男里遺跡99—4区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4・8)

基本的には盛土(約30cm)、現代の耕作土(約20cm)を除去すると、以下は整地土が確認される。この整地土は大きく2つに分けることができ、上位が淡黄灰褐色砂質土(約50cm)で若干の遺物を含み、下位は黄橙色粘質土(約15cm)である。黄橙色粘質土の直下には地山である淡黄褐色砂礫土が拡がっている。元来全面に存在したものだと考えられるが、トレンチの南半では後述する遺構に切られている。またこれらの整地層の間には部分的に灰褐色粘質土(約20cm)や遺構の埋土でもある暗灰褐色シルトが認められ、整地が一度には行われていないことを示している。これらのうち整地層下位である黄橙色粘質土の上面において遺構が確認された。

3. 遺構 (PL. 4・8)

確認された遺構は溝(SD01)、落ち込み(SX01)、ピットである。

溝はトレンチの北東部で確認された。西肩を隣り合う落ち込みに切られ、東端についてはトレンチ外へと伸びるため全形は不明であるが、ほぼ東西方向に直線的に伸びるものである。規模は東肩の長さ1.1m、最大幅60cm、確認面からの深さ15cmを測る。ただし断面による確認ではこの溝は灰褐色粘質土より切り込まれていることが観察され、それによると元来の深さは60cm程度である。断面形状は西半部が落ち込みにより切られているため、東側のみしか確認できないが、逆台形を呈するものと考えられる。底部の状況はおおむね平坦であるが、東側に向いてわずかに傾斜しており、東西端部での比高差は5cmを測る。埋土は1層であり、淡褐色ブロックを多く含む暗灰褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

落ち込みはトレンチの南半部において確認された。東西端部および南端部がトレンチ外へと拡がるため、全形は明らかでないが、確認された北肩部は東から南西方向に向かって直線的に伸びるものである。規模は北肩の長さ2.6m、最大幅80cm、確認面からの深さ20cmを測る。ただし落ち込みについても溝と同様に断面観察によると元来の深さは60cm程度である。断面形状は北半部のみを確認であるが、ややいびつな逆台形を呈している。底部の状況はおおむね平坦である。埋土は2層であり、上層が淡暗褐色礫含土、下層が淡暗褐色粘質土である。このうち上層より多くの遺物が出土した。

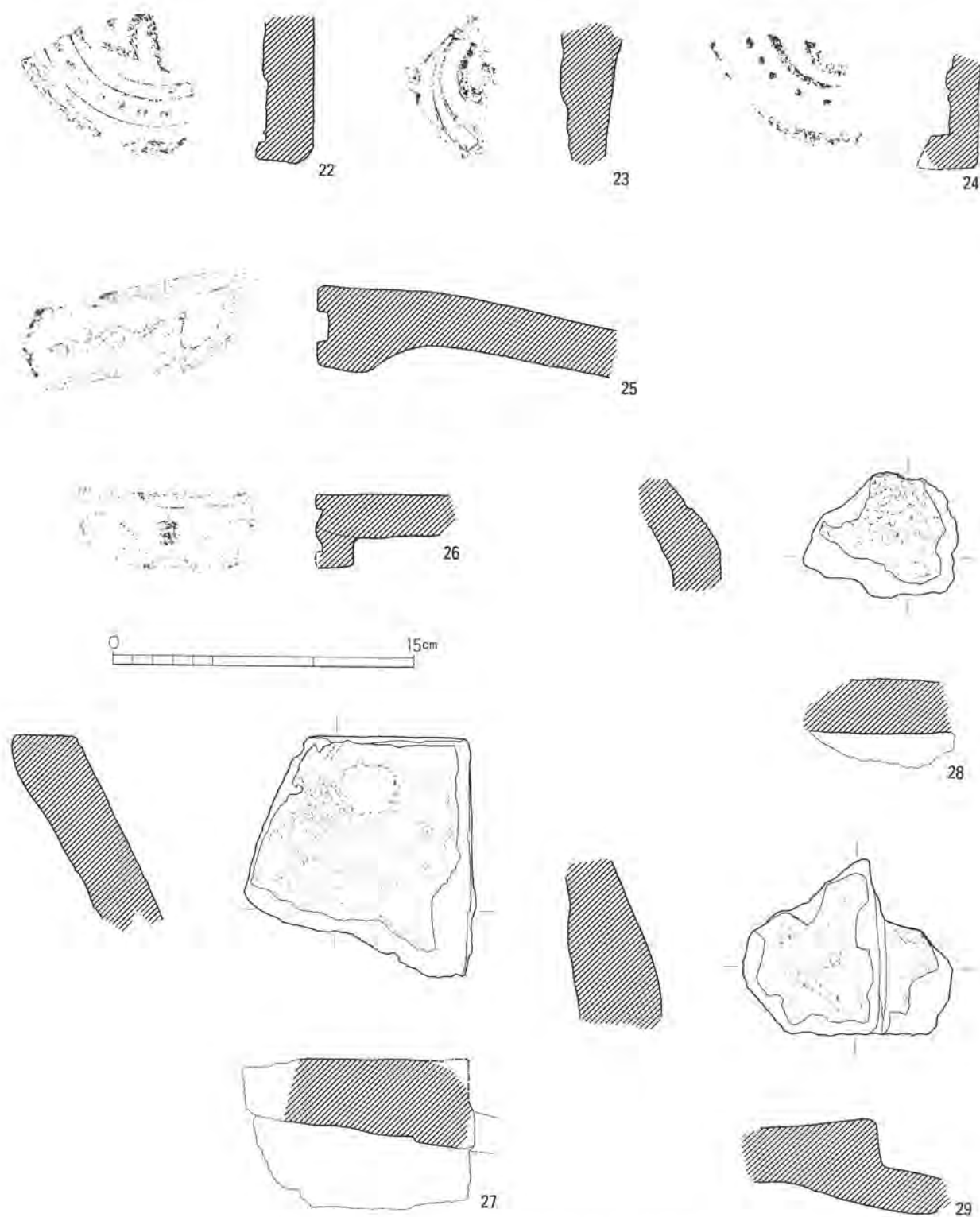
ピット(Pit01)はトレンチの中央北寄りにおいて確認された。平面形は東西を向いた長楕円形を呈する。長径30cm、短径20cm、確認面からの深さは最大で10cmを測る。淡黄灰褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

4. 遺物 (PL. 17・18、第7・10図)

落ち込みよりコンテナ7箱分の遺物が出土したが、そのほとんどが瓦であり、わずかに土器類が含まれているといった状況であった。また多量に出土した瓦に関しても軒瓦は非常に少なく、図示し得たものの他には巴紋軒丸瓦の小片が2点あるのみである。22~24は軒丸瓦、25・26は軒平瓦、27~29は道具瓦、30・31は瓦質土器である。

22は梵字紋軒丸瓦である。上半部は欠損している。無紋の外縁部を持ち外区には2重の圏線が巡る。圏線の間には小降りで平板な珠紋が配される。内側の圏線と内区との境にはさらに幅1cm以下の平坦面があり、内区の中央には梵字紋をおく。梵字紋は断面方形を呈し非常にシャープなものである。瓦当面の数カ所に範傷が認められる。瓦当裏面はナデ、瓦当側面はヘラケズリの後にナデ調整である。焼成は

非常に堅緻であり、黄灰褐色を呈する製品。23および24は巴紋軒丸瓦である。23は外縁の全てを欠損するが、右巻きの巴紋である。巴の頭部は高く断面半球形を呈し、尾部は長く互いに接しており、その外側には大粒の珠紋を密に配する。瓦当面にはハナレズナが付着している。瓦当裏面はナデ調整である。24は左巻きの巴紋である。無紋の外縁を持つ。巴の頭部は平坦であり、尾部は太く短い。巴の周囲に小



第7図 男里遺跡99-4区出土の軒瓦・道具瓦

振りの珠紋を配する。瓦当裏面はナデ調整である。

25・26は唐草紋軒平瓦である。25は幅広の外縁を持ち、細く線画に近い唐草紋が表される。瓦当面、また平瓦の凹凸両面にハナレズナが付着している。平瓦の先端に顎部の粘土を補足し、顎部裏面から平瓦部にかけては縦方向のナデによって仕上げられる。26は卵形をした中心飾りから左右に大きく展開する唐草を表す。低く幅の狭い外縁を持つ。段顎であり、平瓦との接合部にはナデ調整が認められる。平瓦の凹面にはハナレズナが付着する。

27～29はいずれも雁振瓦である。27は鱗部である。頭部から直線的に伸び、横方向の断面が「く」字状を呈する製品と考えられる。凹凸両面に布目が残るが、凸面には明瞭に布目が残るのに対し、凹面ではナデ調整および玉縁部との接合部に向かって施される縦位のケズリのために、布目は部分的にしか残っていない。端面および側端縁はヘラケズリによって平滑に仕上げられる。28は頭部である。凹面に布目が明瞭に残る。29は頭部からやや平板に開く鱗部である。玉縁部も平板であり、半裁筒形をなさない。両面ともにわずかに布目が残る。

30は瓦質の播り鉢である。直線的に伸びる体部から外傾し明瞭な平坦面をなす口縁端部を持つ。口縁外面はナデ、また端部直下にはハケ目が、更に体部はケズリ調整がなされる。内面にはハケ目が施されるが、口縁端部にのみ粗いハケ目が施され、さらに8条1単位の播り目が認められる。31は瓦質の甕である。内傾しつつ立ち上がる体部に、緩やかに外反する口縁端部を持つ。体部外面には粗い横方向のタキが施され、内面はナデで仕上げられる。

第6節 99—5区の調査

1. 位置 (PL. 3、第8図)

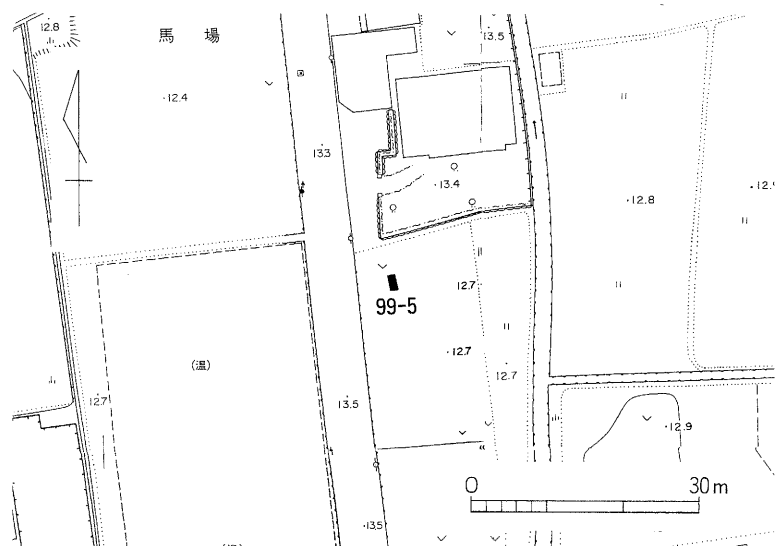
調査地は遺跡の東部、現在の馬場集落の西端に位置している。地形分類上では沖積段丘上に立地している。周辺の調査では、砂礫層の地山が確認されることが多い。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 5・8)

層位は約1.1mの厚い盛土を除去すると、旧耕作土である暗灰色土(約25cm)、灰色混じり褐色土(約10

cm)、暗褐色土(約15cm)と続き、地山である褐色土に至る。地山面の標高は12.3m前後である。遺構は確認できなかった。また、遺物は第4層から土師器が数点出土したが、細片のため図化し得なかった。

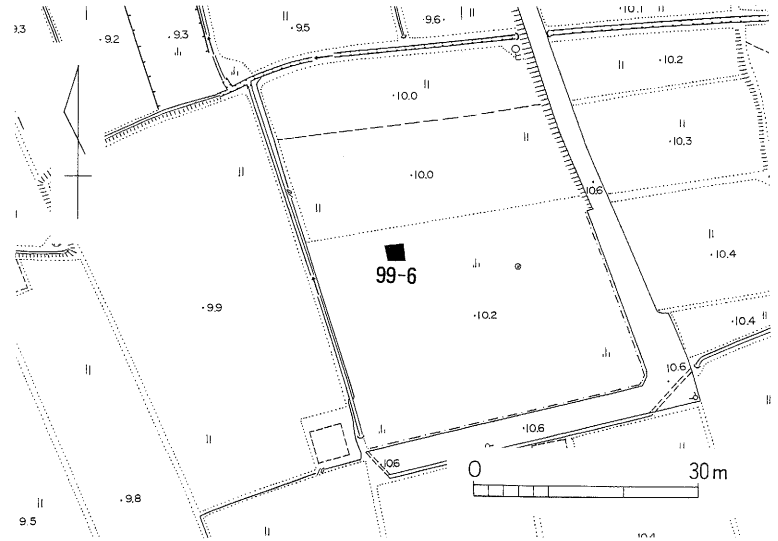


第8図 男里遺跡99—5区地形図

第7節 99-6区の調査

1. 位置 (PL. 3、第9図)

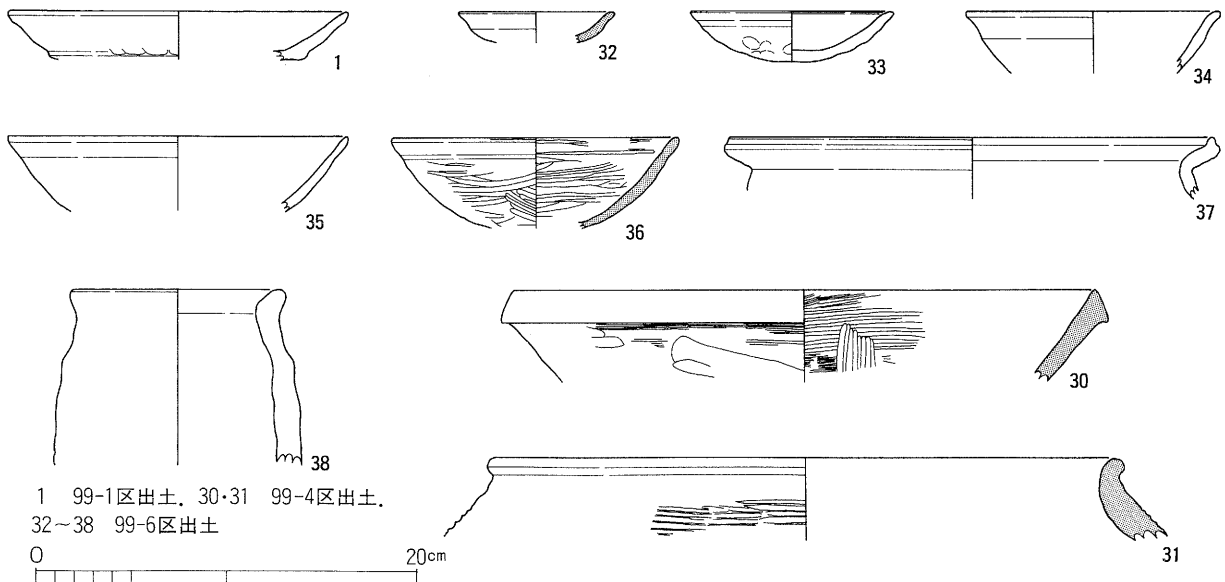
調査区は遺跡の北東部に位置し、府道堺阪南線より約100m南へ、また双子下池の北東コーナーより北東へ約200mの地点である。調査区を含むこの一画は近年盛んに個人住宅が建設されており、それに伴い過去に多くの調査が行われている。これらの調査では明確な遺構は確認されていないものの、当遺跡特有のものとされる黒褐色粘土層が広範に分布していることなどが明らかにされている。地形分類上は沖積段丘面上に立地しているものと考えられる。トレンチは1カ所設定した。



第9図 男里遺跡99-6区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5・9)

約50cmの盛土を除去すると、I層・淡灰色混じり灰黒色土(約40cm)、II層・暗褐色混じり淡灰褐色土(約10~30cm)があるが、これらは互いに攪拌された状態が看取されるもので、特にII層上面にはかなりの凹凸が認められる。続いてIII層・暗褐色粘質土(約15~30cm)があり、これより以下についてはプライマリーな状態を保っている。暗褐色粘質土の下には地山の変質土と考えられるIV層・淡暗灰褐色砂質土(約10cm)があり、地山である淡黄褐色粘質土と続く。これらのうち暗褐色粘質土より多くの遺物が出土した。平面的には遺構は確認されなかったが、南北両壁の断面観察によるとIII層がわずかに以



1 99-1区出土、30・31 99-4区出土、
32~38 99-6区出土

第10図 男里遺跡99-1・4・6区出土の土器

下のⅣ層および地山層と切り合うことから、南北方向に伸びる巨大な遺構の東肩部分である可能性がある。すなわちⅢ層は遺構の埋土であると考えられ、先述した当調査区の周辺で過去に行われた多くの調査のうち、唯一当調査区より南に約15mの地点に位置する95-12区においてⅢ層に相当する暗褐色粘性シルト層が約30cmの層厚で確認されていることも、この溝状の遺構が南北に伸びるものである可能性を高めているといえよう。

3. 遺物 (PL. 18、第10図)

図示した遺物は全てⅢ層から出土したものである。33~35は土師器、32・36は瓦器、37は土師質の製品である。

33は土師器小皿である。底部からわずかに内湾しつつ立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。外面にはユビオサエの痕跡が残る。黄橙色を呈する製品。34は土師器椀である。直線的に立ち上がる体部にわずかに外反する口縁端部を持つ。口縁端部はヨコナデによって、段を有する。内外面ともにミガキが施されるが、詳細は不明である。黄橙色の製品。35は土師器椀である。直線的に立ち上がる体部からわずかに内湾する口縁端部を持つ。口縁端部はヨコナデによって段を有する。全体に激しく2次焼成を受けており、特に内面には多量の煤が付着している。32は瓦器小皿である。内湾しながら立ち上がる体部に外反する口縁端部を持つ。口縁端部はヨコナデによって段を有する。内外面共にミガキが施されるが詳細は不明である。灰白色の製品。36は瓦器椀である。底部から直線的に立ち上がり、口縁端部はヨコナデによってわずかに外反する。体部内外面共にミガキが施される。37は土師質の土釜である。頸部から「く」字状に大きく屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は上方につまみ上げられ、明瞭な平坦面をなす。摩滅が激しく詳細は不明であるが、胎土に多量の砂粒を含む。38は土師質真蛸壺である。わずかに内湾しつつ直線的に立ち上がる体部に外反する口縁部を持つ。内外面共にユビオサエの痕跡が認められる。2次焼成を受けており、内面及び破断面に煤が付着している。廃棄後に火中したものであろう。にぶい橙色を呈する製品。

第8節 98-7区の調査

1. 位置 (PL. 3、第11図)

調査地は現在の男里集落の東側、府道堺阪南線の「男里」交差点から北へ約120mの地点に位置し、地形分類上では男里川の自然堤防上に立地している。過去の調査では、調査地の東側では砂礫層が、西側では中世の時期を中心とした遺構や遺物が確認されている。トレンチは1カ所を設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5・9)

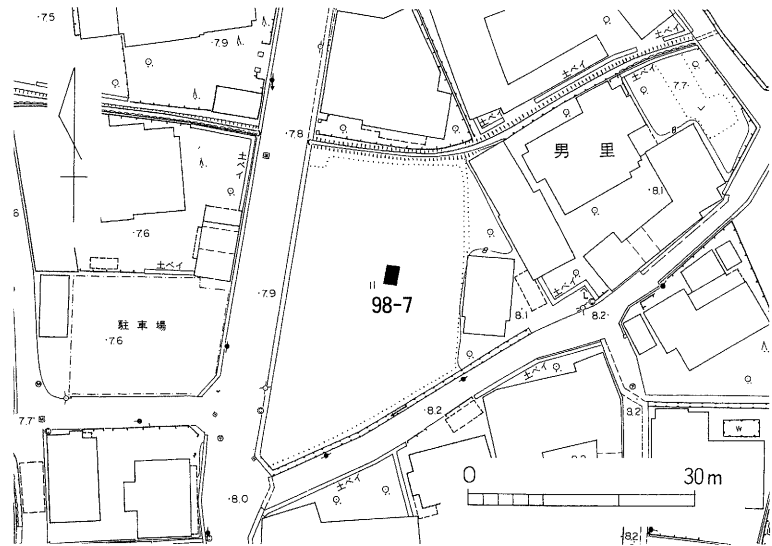
層位は、第1層・耕作土(約15cm)、第2層・淡灰色土(約10cm)、第3層が褐色混じり暗灰色土(約20cm)、第4層が地山の灰色混じり暗黄褐色土である。地山面の標高は7.6m前後を測る。遺構はすべて地山の上面で検出した。

3. 遺構 (PL. 5・9)

検出した遺構は、土坑・ピットである。

土坑はトレンチ外に拡がるため全形は知り得ないが、その検出長は長軸90cm、短軸60cm、深さ20cmを測る。埋土は褐色混じり灰色土で、底部には人頭大の礫が1点とその周辺に拳大程度の礫がまとまって認められた。細片のため図示できなかったが、埋土から黒色土器A類が1点出土している。

ピットは円形を呈し、深さはそれぞれ5cm程度と浅い。埋土はすべて褐色混じり灰色土である。ピットからの遺物の出土はなかった。



第11図 男里遺跡98-7区地形図

第9節 98-8区の調査

1. 位置 (PL. 3、第3図)

調査区は府道堺阪南線「男里川」交差点を約150m北上した地点に位置し、地形分類上は男里川右岸に拡がる氾濫原または自然堤防上に立地しているものと考えられる。周辺では安定した地山面はあまり確認されていない。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5・10)

厚さ約1mの盛土を除去すると、現代の耕作土であるI層・灰褐色シルト(約10cm)および床土であるII層・橙色混じり淡灰褐色土(約10cm)が拡がる。さらにIII層・暗褐色混じり淡灰褐色砂質土(約15~30cm)、IV層・暗褐色混じり暗黄灰褐色粘質土(約30cm)と続く。またトレンチの東半部ではIII層とIV層の間にV層・淡灰褐色混じり暗褐色砂質土(約10cm)が部分的に存在している。IV層直下にはVI層・灰褐色砂礫土(約30cm)が拡がっており、以下は部分的な確認しか行っていないが明灰褐色砂へと続く。

これら確認された層序のうち、III層からV層については旧耕作土またはそれに伴う整地土と捉えることのできるもので、VI層以下の不安定な地所に整地を行い耕地化していったものであると考えられる。またVI層より弥生時代の高杯と考えられる細片が出土したが、図化し得えず、詳細は不明である。氾濫原形成時期の一端を示すものであろうか。

註 ① 1995年度、大阪府教育委員会によって実施された双子下池調査時における採集遺物。

大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・IV』(1999)

② 泉南市教育委員会「男里遺跡・II」『泉南市文化財年報No.1』(1995)

③ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)

④ ③に同じ。

- ⑤ 1983年度、大阪府教育委員会、1993年度、財団法人大阪府埋蔵文化財協会、1995～96年度、財団法人大阪府文化財調査研究センターの発掘調査による。
- ⑥ 泉南市史編纂委員会「考古編」『泉南市史－資料編－』（1982）
泉南市史編纂委員会「第二章 古代の泉南」『泉南市史－通史編－』（1987）
- ⑦ 泉南市教育委員会「男里遺跡91－13区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅳ』（1999）
- ⑧ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』（1997）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』（1997）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅲ』（1998）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅳ』（1999）
- ⑨ 泉南市教育委員会「男里遺跡96－4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1997）
泉南市教育委員会「男里遺跡97－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
- ⑩ 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
- ⑪ 1998年度、泉南市教育委員会の発掘調査による。（98－6区）
- ⑫ 泉南市教育委員会「男里遺跡96－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1997）
- ⑬ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）
- ⑭ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』（1997）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』（1997）
- ⑮ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1993）
- ⑯ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査現地説明会資料』（1996）
城野博文「泉南市戎畑遺跡の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会（第35回）資料』財団法人大阪府文化財調査研究センター（1997）
泉南市教育委員会「戎畑遺跡98－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
- ⑰ 大阪府学務部『大阪府史蹟名勝天然記念物第四冊』（1929）
泉南市史編纂委員会「第二章 古代の泉南」『泉南市史－通史編－』（1987）
- ⑱ ⑪、⑯と同じ。
泉南市教育委員会「戎畑遺跡97－2区、97－13区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
泉南市教育委員会「樽井南遺跡96－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）
泉佐野市教育委員会「6．湊遺跡」『昭和63年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅸ』（1989）
財団法人大阪府埋蔵文化財協会『中開遺跡Ⅲ・上町東遺跡』（1994）
財団法人大阪文化財センター『田山遺跡』（1983）
- ⑲ 泉南市教育委員会「男里遺跡97－2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
泉南市教育委員会「幡代遺跡94－6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』（1996）
泉南市教育委員会「光平寺跡97－1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI』（1999）
- ⑳ 1982年度、泉南市教育委員会の発掘調査による。
- ㉑ 泉南市教育委員会「男里遺跡97－4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
- ㉒ ⑤と同じ。
- ㉓ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅳ』（1999）
- ㉔ 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）
- ㉕ 泉南市教育委員会「男里遺跡95－12区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）

第3章 幡代遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL. 1・2、第12図）

市域の西端を流れる男里川は上流に至っては金熊寺川と名前を変えるが、その金熊寺川の右岸に広がる沖積段丘面上に幡代遺跡は立地している。

金熊寺川から男里川の右岸には本書にも報告しているように男里遺跡や岡中遺跡など数多くの遺跡が連なっており、歴史的情報の非常に豊富な地域である。現在知られている情報をまとめると以下のようになる。

まず遺跡の北西縁部や北東部において弥生時代の遺物が散見される^①。どちらもまとまりを持たず、今のところ詳細は明らかでないが、同水系に属し、共に隣接する男里遺跡や幡代南遺跡^②との関連が強く想定されるものである。しかし古墳時代や奈良時代、平安時代前半に属する遺構や遺物は挙げることができず、活動が希薄であったと考えざるを得ない。

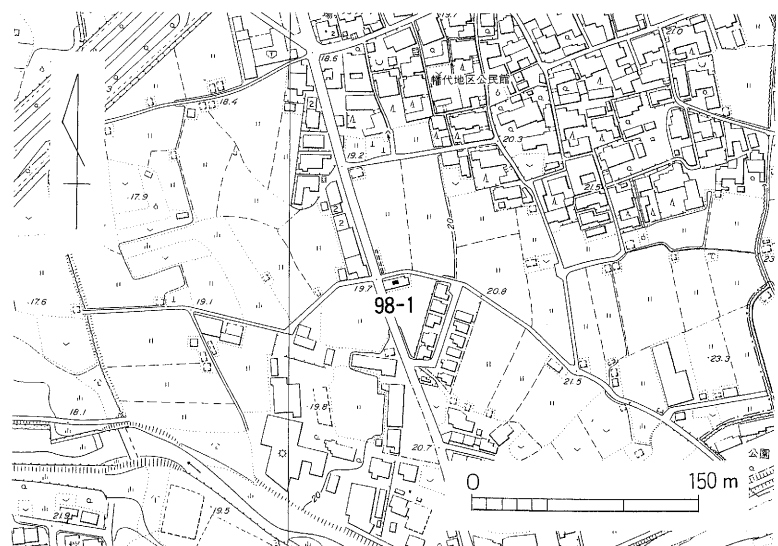
平安時代後期には遺跡の中央部、現在の幡代集落の東縁部において集落を構成すると考えられる柱堀方などの遺構が確認されている^③。また遺跡の北西縁部においても同様の成果が得られており、周辺では当該期の瓦なども確認されている。鎌倉時代以降には前代よりもさらに東に向かって遺跡が展開するようであり、遺跡の北東部において複数棟の掘立柱建物などが確認されている^⑤。さらに室町時代になると現在の集落の範囲内において遺構や遺物が多く確認されるようになる。このような動向をみせる中世期以降、人々は同じ場所に連綿と集落を営むようであり、近世後期にいたってもその傾向は変わらない。現在の集落内の調査において家屋解体に伴う廃棄土坑などが確認され、多量の瓦や日常雑器が出土しており、注目される^⑥。

第2節 98-1区の調査

1. 位置（第12・13図）

調査区は遺跡の南西端部に位置し、国道26号線「幡代」交差点より約250m南へ下った地点である。

現在の幡代集落の南西端からさらに25m程南に位置している。前節で述べたように当遺跡では過去の調査が現集落内に集中する傾向にあったため、今回のように遺跡の南西部における調査例はない。比較的近接するものとして、北に約50m離れた地点では中世に属する柱堀方などが知られている。地形分類上は沖積段丘



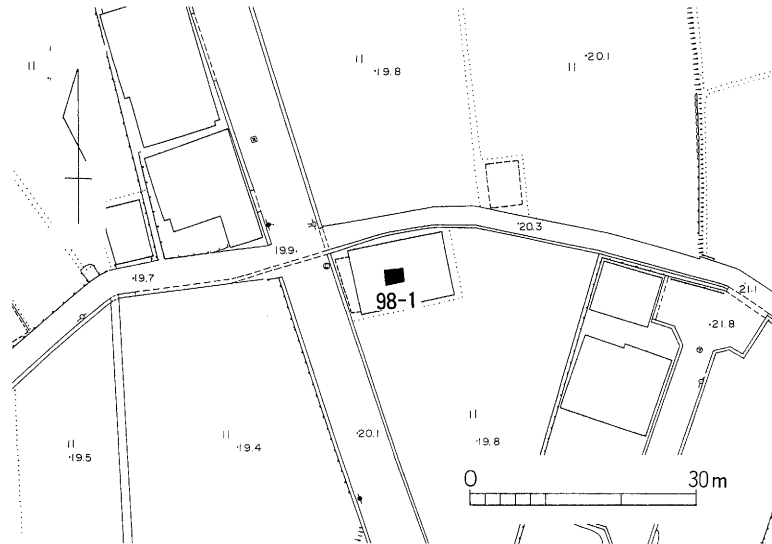
第12図 幡代遺跡調査区位置図

面上に立地しているものと考えられる。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 5・10)

調査によって確認された層序は基本的に4層である。現代の耕作土である暗灰色土(約20cm)及びそれに伴う床土層である明橙色混じり淡灰褐色土(約5cm)と橙色混じり淡灰褐色土(約10cm)が各々水平に堆積している。直下には淡黄褐色砂質土の地山面が拡っている。標高は約



第13図 幡代遺跡98-1区地形図

13.5mを測る。地山上面において遺構が確認された。いずれの層からも遺物の出土はなかった。

3. 遺構 (PL. 5・10)

確認された遺構は落ち込みが1カ所である。落ち込みはトレンチの西半部において確認され、南西から北東方向に直線的に伸びる肩を持つ。南北の両端および西端がトレンチ外に拡がっており、全形は不明であるが、確認長1.4m、最大幅40cm、深さ30~50cmを測る。落ち込み東端での断面形状は碗型を呈し西方向へ落ちていくと共に、南から北方向に向かっても緩やかに傾斜しており、両端での比高差は約20cmを測る。埋土は全部で13層確認され、そのほとんどが層厚10~20cmの厚さで、ほぼ水平に堆積しており、またそれらのうち4つの層について旧耕作土と捉えられるものであった。これらのことから、この落ち込みは耕作に伴う段であると考えられる。

- 註 ① 1983年度、大阪府教育委員会の発掘調査による。
1993年度、財団法人大阪府埋蔵文化財協会の発掘調査による。
財団法人大阪文化財センター「調査概略集-幡代遺跡-」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第30回)資料』(1994)
- ② 1993年度、財団法人大阪府埋蔵文化財協会の発掘調査による。
財団法人大阪文化財センター「調査概略集-幡代南遺跡-」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第30回)資料』(1994)
- ③ 泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
- ④ 1983年度、大阪府教育委員会の発掘調査による。
- ⑤ 1993年度、財団法人大阪府埋蔵文化財協会の発掘調査による。
財団法人大阪文化財センター「調査概略集-幡代遺跡-」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第30回)資料』(1994)
- ⑥ ③と同じ。
泉南市教育委員会「幡代遺跡94-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)

第4章 岡中遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1・2、第14図)

岡中遺跡も幡代遺跡や男里遺跡などと水系を共にする遺跡である。地形分類上は金熊寺川の右岸に広がる沖積段丘面に立地するが、既往の調査によると遺跡の広範な地点より氾濫原に属する地山が確認されており、比較的不安定な土地に展開する遺跡であるということが明らかになりつつある。

現在、遺跡の中央から北半部に集落が展開している。集落の北東端から中央を通して屈曲し、山中溪へと向かう道が、熊野街道に比定され、

また集落の中央、街道より少し南に外れたところには鎮守社が祀られ、その袂には樹齢700年を越える大樟や大榎が大きく枝葉を広げている。

当遺跡は既往の調査によって平安時代末期から中世に盛期を有することが明らかとなっている。現在までに平安時代末期に創建が求められる寺院跡^①や室町時代の土墳墓^②、鍛冶施設などが確認されている。特に寺院跡において出土した複弁蓮華紋軒丸瓦は当遺跡の北東約300mに位置する林昌寺瓦窯^③において生産されたことが明らかであり、かつ同範の製品が他の遺跡からも出土するなど、当該期の瓦生産体制や寺院経営に肉迫しうる資料として注目される。

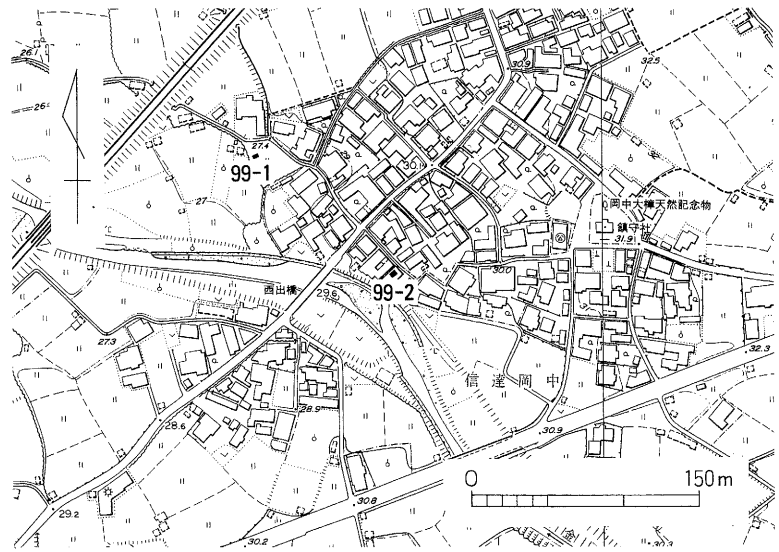
今のところ集落の実態に直接結びつく遺構や遺物は得られていないが、遺跡の南端部では中世以降、継続して利用された耕作地が確認されていることから、集落域の南端を限定できる。今後街道に面した地点での調査がさらに進めば、集落域、生産域、また寺域や墓域など、中世村落の具体像が鮮やかに蘇るものと期待される。

第2節 99-1区の調査

1. 位置 (第14・15図)

調査地は現在の岡中集落の西縁部に位置し、当調査地周辺の調査においては、東側約100mの地点^⑤では、中世の遺物や集落に関する遺構が多く検出されている。地形分類上は沖積段丘上に立地していると考えられる。

トレンチは1カ所設定した。



第14図 岡中遺跡調査区位置図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5・10)

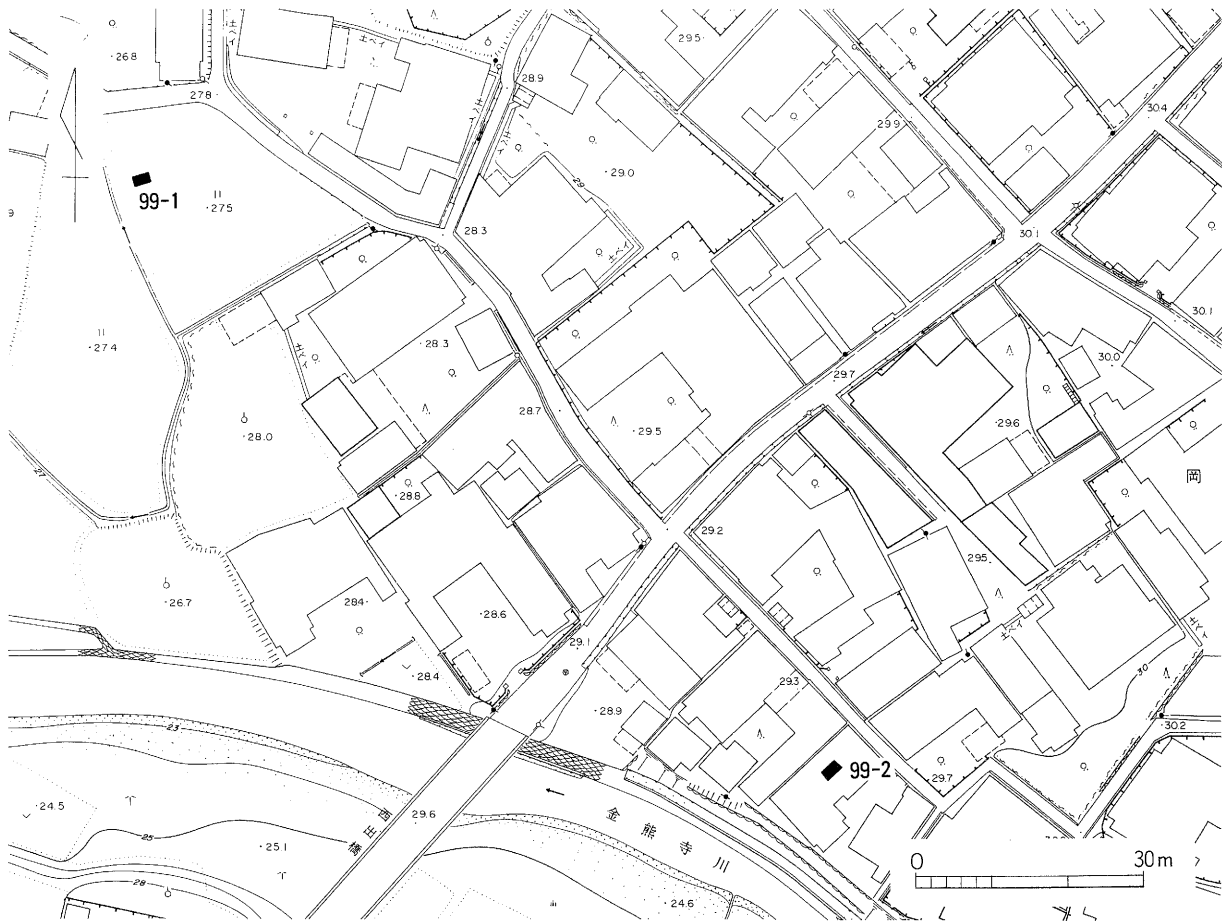
約50cmの盛土を除くと、Ⅰ層・現代の耕作土(約10~35cm)が露呈し、Ⅱ層・床土層である灰褐色シルト(約10cm)、以下Ⅲ層・淡灰色シルト(約5cm)、Ⅳ層・茶褐色シルト(約10cm)、Ⅴ層・淡褐色砂質シルト(約5~15cm)と続き、地山である直径10~20cmの礫を含む灰褐色砂質シルトに至る。

遺物はⅣ層より土師質土器や瓦器などの細片が検出されており、中世の遺物包含層と考えられ、その拡がりを確認することができた。また、Ⅴ層と地山は遺跡の南側を流れる金熊寺川の氾濫に伴う堆積であり、Ⅴ層以上の層位の状況から遺構は検出されていないが、中世以降、調査地周辺は比較的安定していたと考えられる。

第3節 99-2区の調査

1. 位置(第14・15図)

調査区は遺跡の南西部、金熊寺川の右岸に近接した地点に位置する。周辺はこれまでほとんど調査例が無く、遺構や遺物包含層の拡がり等の新たなデータの獲得が期待されている地点である。トレンチは1カ所設定した。



第15図 岡中遺跡99-1・2区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5・11)

層位は、第1層・明褐色土(約30cm)、第2層・暗赤褐色土(約5cm)、第3層・暗黄褐色土(約20cm)、第4層・暗褐色礫混じり土(約25cm)、第5層・暗褐色土である。このうち第3層は第4層に伴う整地土と考えられる。

今回の調査では遺構は確認できなかったが、時期は明確ではないものの、金熊寺川に非常に近接した地点で比較的安定した面を確認できたことにより、今後の調査によって調査区周辺においても遺構が検出される可能性が高くなったといえるだろう。

- 註 ① 1988年度、泉南市教育委員会の発掘調査による。
② 1987年度、泉南市教育委員会の発掘調査による。
③ 泉南市教育委員会「林昌寺瓦窯」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
④ 泉南市教育委員会「岡中遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XI』(1994)
⑤ 泉南市教育委員会「岡中遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)

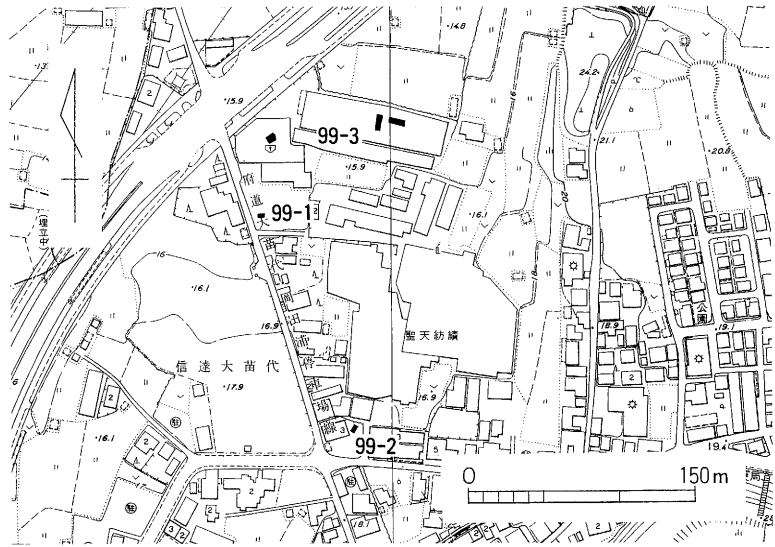
第5章 北野遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1・2、第16図)

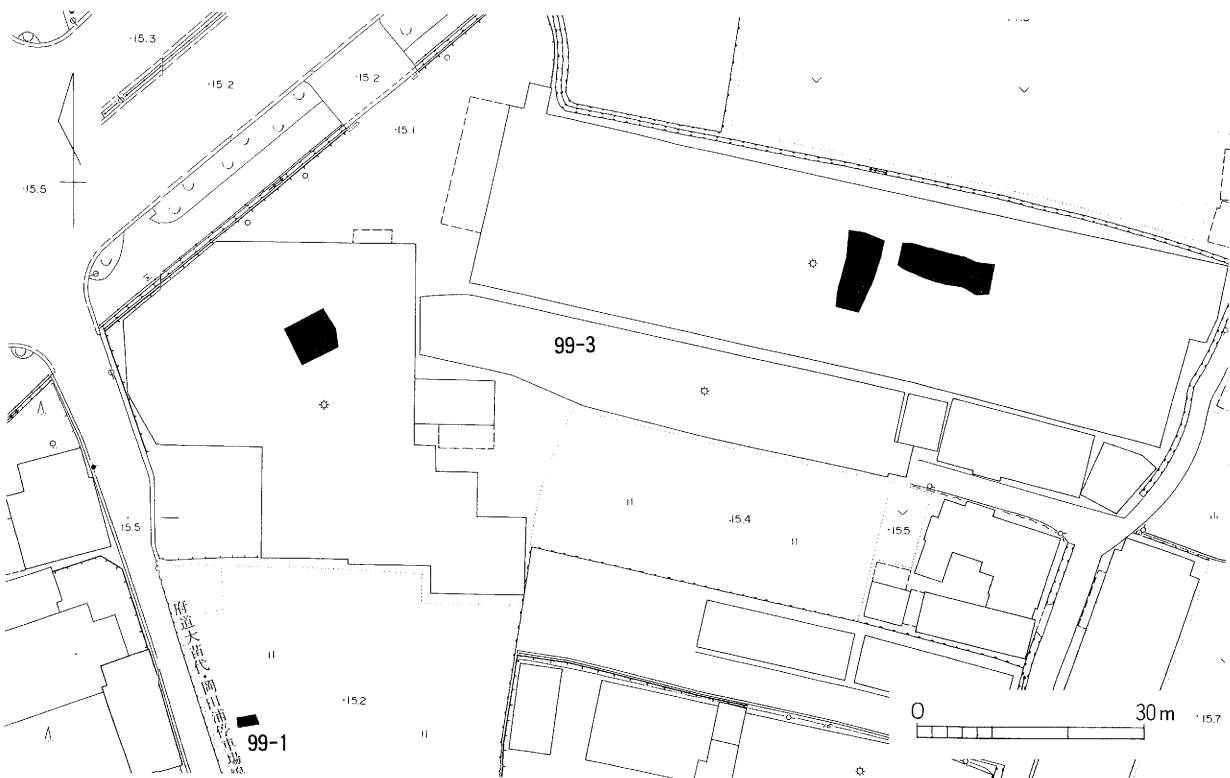
北野遺跡は泉南市の東部、市域の北東端を流れる檜井川の左岸に位置する遺跡である。1988年度の分布調査によって周知されるようになり、その規模は東西に約350m、南北に約330mを測り、南北方向に軸を向けたややいびつな楕円形を呈する。地形分類上では洪積段丘低位面に立地する。

当遺跡の調査は面積が小さいことと、開発が絶対的に少なかったために、本書報告分を除くと数例しかないが、それぞれ貴重な成果が得られて

いる。特に平成3年度の調査では、掘立柱建物2棟、井戸、溝などが検出され、掘立柱建物の中には^①桁行ないし梁間が7間以上の規模をもつ大型の建物も存在する。出土遺物から、平安時代後期の年代が



第16図 北野遺跡調査区位置図



第17図 北野遺跡99-1・3区地形図

考えられ、当時の有力な集団の存在とその集落の一部が明らかとなった。

今後は周辺の遺跡の動向を踏まえ、当該期の集落規模や集落に伴う生産域などを追求し、歴史的景観の構築に務めなければならない。

第2節 99-1区の調査

1. 位置 (第16・17図)

調査区は遺跡の中央からやや南西部、国道26号線の「大苗代西」交差点から南東に約100mの地点に位置し、府道大苗代岡田浦停車場線の東側に面している。地形分類上では、樫井川左岸に大きく広がる洪積段丘の低位面に立地している。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5・11)

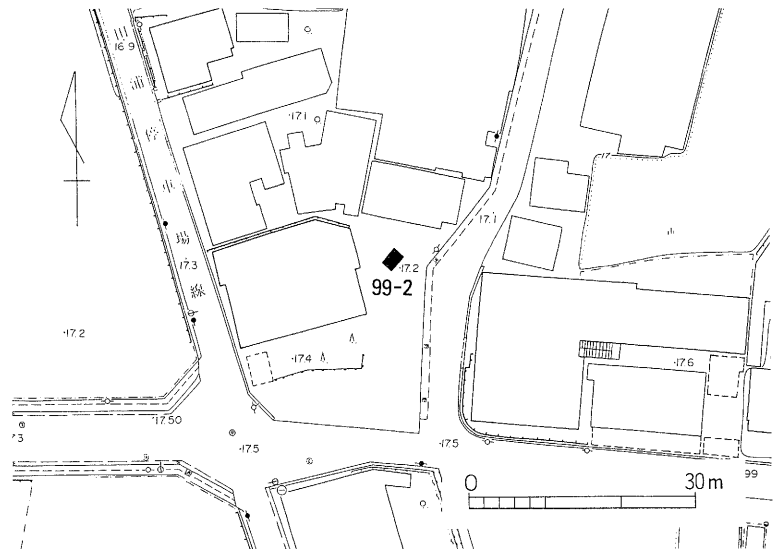
層位は第1層・盛土 (約60cm)、第2層・暗灰色土 (約10cm)、第3層・淡灰色土 (約10cm)、第4層・黄褐色混じり淡灰色土 (約15cm)、第5層・灰色混じり明黄褐色土 (約10cm)、第6層・灰色混じり茶褐色土 (約30cm)、第7層・暗黄褐色粘質土の地山である。各層はすべて水平に堆積しており、第2層、第4層は耕作土と捉えられる。地山面の標高は14.5m前後を測る。第5層から少量の土師器が出土しているが図示し得るものはなかった。また、遺構はいずれの層からも検出されなかった。

第3節 99-2区の調査

1. 位置 (第16・18図)

調査地は遺跡の南端部に位置する。周辺の調査例は少ないが、当遺跡の南部に所在する大苗代遺跡内において、本調査地と接する地点で灌漑または集落の排水施設と考えられる中世の溝が検出されている^②。

地形分類上は洪積段丘低位面にあたると考えられる。トレンチは1カ所設定した。



第18図 北野遺跡99-2区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 5・11)

厚さ約40cmの盛土を除くと、現代の耕作土であるI層・灰色シルト (約5cm) が露呈し、以下、II層・橙色シルト (約10cm)、III層・淡灰褐色砂質シルト (約20cm)、IV層・淡褐色砂質シルト (少量のマンガン粒を含む、約10cm)、V層・灰褐色砂質シルト (約10cm)、VI層・褐色粘質シルト (約5cm)、VII層・茶褐色粘質シルト (約10cm) と続き、地山である淡黄褐色粘質シルトに至る。

いずれの層においても遺構は検出されなかった。またIV層やV層より土師器、須恵器や瓦器などが出土したが、いずれも小片のため図化には至らなかった。

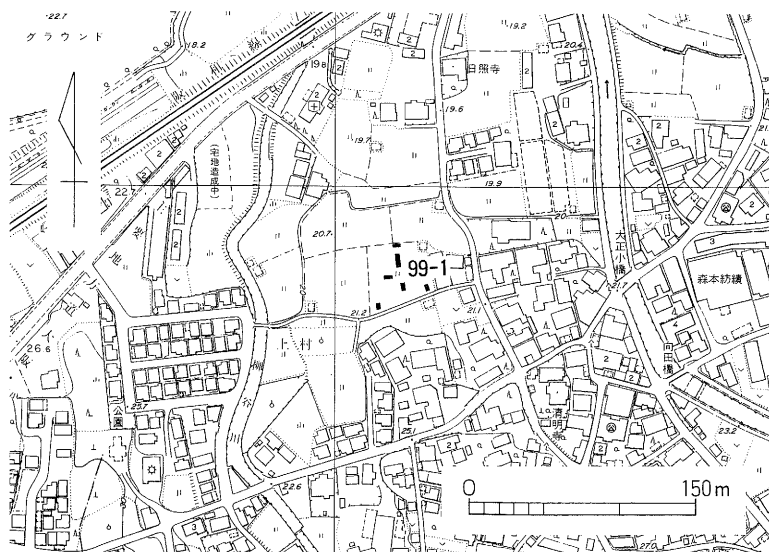
- 註 ① 泉南市教育委員会「北野遺跡」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
② 泉南市教育委員会「大苗代遺跡・I」『泉南市文化財年報No.1』(1995)

第6章 上村遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1・2、第19図)

上村遺跡は、市域東部に広く所在する新家地区の中ではほぼ中央、新家地区を南北に流れる新家川と柳谷川が合流する地点から南へ約300m、上村集落の北西端に接した水田部分に位置している。

遺跡発見の契機は、平成元年度から2年度にかけて市域において大規模に行われた分布調査によるものである。その後約10年間、地目も水田であることから、発掘調査はおろか届出等も全く行われることは無かった。しかし、ここ1～2年新家駅周



第19図 上村遺跡調査区位置図

辺では、バブルの崩壊以降しばらく下火となっていた開発が目立つようになった。特に駅徒歩圏内の住宅建設が行われるようになり、水田等を宅地に変える動きが強まる中で、本調査も行われることとなった。

遺跡は、北側約300mで合流する東西を新家川、柳谷川に挟まれた中間の低位段丘面上に立地し、現況は平坦な地形を有し、安定しているものと考えられる。一方、南側は丘陵の先端が迫っており、遺跡に向かって大きく落ち込んでいる。また、北側も川に向かってやや落ち込んでいる。

周辺の遺跡に目を転じると、北側には、向井山遺跡や新家遺跡など、新家川流域の主な弥生遺跡とも眺望のきく関係となっており、表面採集において確認された中近世以外にもさまざまな時代の遺構が検出される可能性もあり、今後の上村遺跡を含めた新家川流域の調査の進展が期待される。

第2節 99-1区の調査

1. 位置 (第19・20図)

調査区は、遺跡のほぼ中央から南部分で、府道大阪和泉南線「新家川橋」交差点から南東に約150mに位置し、調査区南側が市道上村皿田池線に面している。東西を新家川、柳谷川に挟まれ、そのほぼ中間地点で調査区すべてが同一の水田内に位置する。地形的には、低位段丘面上に立地するものと考えられる。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5・12)

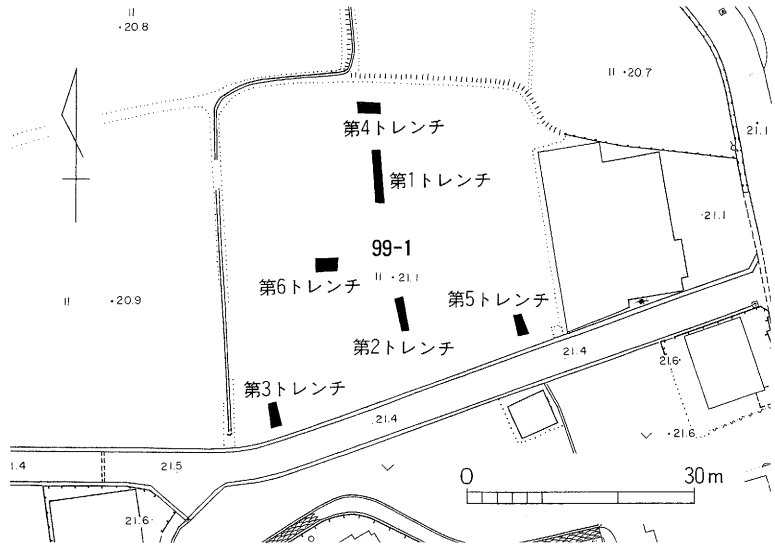
トレンチは、全部で6か所設定した。前述のとおり、すべてのトレンチが一枚の水田に含まれ、ほぼ

同様の層位を示す。本報告においては、層位が最も代表的な第1トレンチのみを報告する。

滋味土（約15cm）、明黄褐色砂質シルトの現代床土（約20cm）を除去すると、灰褐色砂質シルト（約20cm）、灰褐色粘性シルト（約10cm）、褐色粘性シルト（約10cm）、褐白色粘性シルト（約15cm）など数層の旧耕作土と考えられる層位を確認し、最も古い段階の床土と思われる黄橙色粘性シルト（約10cm）を介在し、明

褐色粘性シルトの地山に至る。地山は、礫の場合と粘性シルトの場合があり、調査区南側では、礫層の地山が多かった。また、北側のトレンチの方が旧耕作土が厚く堆積していることが確認された。

遺構は検出されなかった。遺物は、旧耕作土中から土師器、瓦器などが少量出土しているが、図化できるものは無かった。



第20図 上村遺跡99-1区地形図

註 ① 泉南市教育委員会「Ⅲ 事業の概要」『泉南市文化財年報 No.1』（1995）

第7章 岡田遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL. 1・2、第21図）

岡田遺跡は市域の北部に位置し、泉南市と泉佐野市を画する檜井川の左岸に位置する。遺跡の範囲は東西約450m、南北約650mを測り、その平面は南北に長軸をもつ楕円形を呈している。遺跡の現況は、東部に現在の岡田集落が位置し、西部及び南西部には耕作地が広がっている。

地形分類上では、檜井川左岸に広がる広大な洪積段丘低位面上に立地しているものと考えられる。同様の立地を示す遺跡として、東側には岡田東遺跡、南側には北野遺跡、中小路遺跡、中小路西遺跡、新伝寺遺跡、西側には岡田西遺跡、氏の松遺跡などがある。

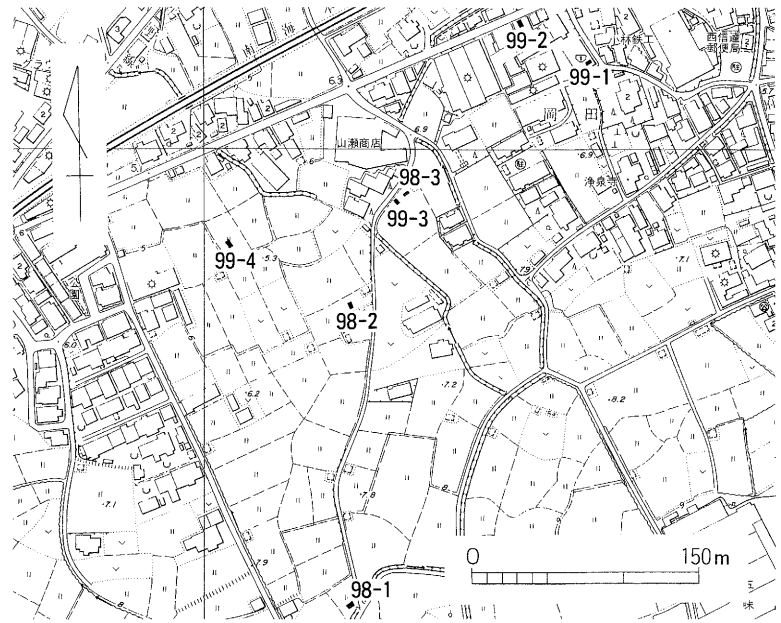
これらの遺跡は、主に中世を中心として展開していたと考えられてきたが、近年の調査では、^①氏の松遺跡で弥生時代前期の集落が、^②岡田東遺跡では古墳時代後期の竪穴住居などが検出され、このような調査成果は、檜井川左岸の段丘面上における遺跡の展開に対して、我々が抱いていた既成概念を大幅に変更させるものとなった。

岡田遺跡は分布調査によって発見されて以来、個人住宅等による発掘調査が小規模ながら数多く行われ、当遺跡の持つ歴史的情報が蓄積され続けてきた。

これまでの調査では、縄紋時代または弥生時代の所産と考えられる石鏃が1点出土している^③ほか、古代の土器も少量ではあるが出土している^④。これらの遺物は、当遺跡がかなり早い時期に開発の手が及んでいたことを示唆するものといえよう。中世以降は遺構、遺物の量が飛躍的に増大し、まさしく当該期が遺跡の盛期であったといえるであろう。

集落に関する情報では、現在の集落内において中世の掘立柱建物に関連すると考えられるピットや室町時代の井戸状遺構^⑤などを検出しており、近年の調査では、遺跡北部においてピットや溝などの遺構とともに多数の遺物が出土している^⑦。これらのことから、当時の集落は現在の浄泉寺周辺に広がっていたと考えられる。

生産では現在耕作地として利用されている遺跡の西部では、複数の耕作面が確認されることから、開発されて以来、連綿として耕作地として利用されていたことが伺われる。また最近の調査では、近現代における地域の地場産業であった煉瓦生産に伴う粘土採掘坑が広範囲で検出されており^⑧、^⑨時代は降るものの土地利用の状況を垣間見ることができる。



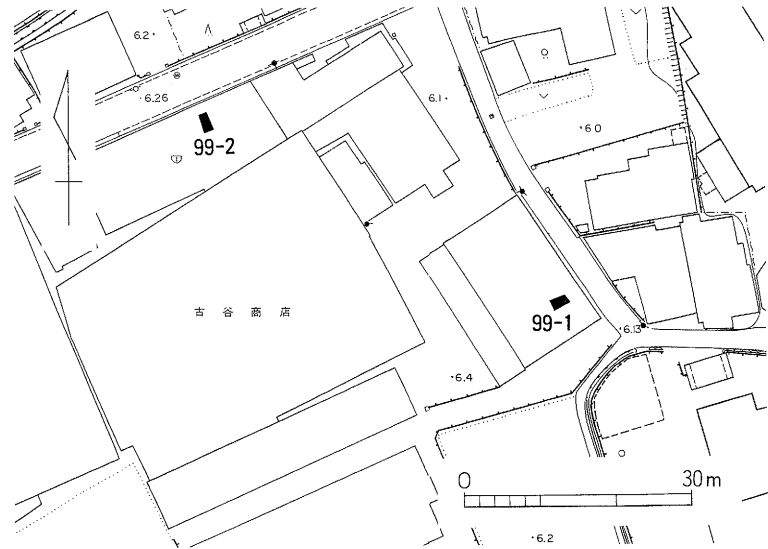
第21図 岡田遺跡調査区位置図

以上のようにこれまでの調査では中世の集落範囲や生産域、近代以降の土地利用の状況などが徐々にではあるが明確になってきている。今後の調査では更なるデータの蓄積と共に、周辺の遺跡との関連を視野に入れた幅広い研究が期待される。

第2節 99-1区の調査

1. 位置 (第21・22図)

調査区は遺跡の北端部に位置し、地形的には洪積段丘低位面の先端に立地するものと考えられる。近年、西側に隣接した地点の調査において、中世を中心とした溝などとともに多数の遺物が検出されている。トレンチは1カ所設定した。



第22図 岡田遺跡99-1・2区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 6・12)

層位は、第1層・盛土(約45cm)、第2層・暗灰色土(約15cm)、第3層・褐色混じり灰色土(約10cm)、第4層・暗灰色土(約20cm)、第5層が地山の褐色混じり暗黄褐色土である。地山面の標高は6.9m前後を測る。遺構はすべて地山面で検出した。

3. 遺構 (PL. 6・12)

検出した遺構は、南東-北西方向に延びる溝が2条(S D01、02)と土坑1基(S K01)である。S D01は幅30~50cm、S D02が幅10~20cmを測り、深さはそれぞれ5cm程度と浅い。埋土はともに灰色砂質土で、S D01から中世の所産と考えられる平瓦が数点出土している。S K01は長軸30cm、短軸20cmの楕円形を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は暗茶褐色土である。埋土からの遺物の出土はなかった。

第3節 99-2区の調査

1. 位置 (第21・22図)

調査区は99-1区の北西約40mに位置し、市道岡田駅上線の南側に面している。過去の調査では遺構、遺物が多数検出されている地点である。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 6・12)

層位は第1層・盛土(15~30cm)、第2層・暗灰黒色土(5~25cm)、第3層・明茶褐色混じり灰色土(約15cm)、第4層・灰色混じり明黄褐色土(10~20cm)、第5層・灰色混じり暗茶褐色土(約20cm)、第

6層が地山の明褐色粘質土である。遺構は第5層上面において井戸を1基検出した。遺構の検出面の標高は約6.6m、地山面の標高は6.4m前後である。

3. 遺構 (PL. 6・12)

井戸は調査区外に拡がるため全形は知り得ないが、直径約1.5mの円形を呈するものと考えられる。石積み等はなく、いわゆる素掘りの井戸である。地山の上層である第5層上面から掘り込まれているが、南肩にのみ第5層上部に第4層の灰色混じり明黄褐色土が認められることから、ある時期に崩壊等の原因によって補修がおこなわれた可能性が考えられる。深さ50cm程度緩やかに落ち込み、そこからは径約50cmの円形を呈し、ほぼ垂直に落ち込む。湧水が激しく、底部までの掘削には至らなかったため深さは不明である。埋土は灰色砂質土で中世の所産と考えられる平瓦が数点出土している。

第4節 99-3区の調査

1. 位置 (第21・23図)

調査区は、遺跡の北方、現在の岡田集落の西はずれに位置する。本書報告の98-3区トレンチからは、南東へ約10mの地点に位置する。近年、遺跡北方の住宅地及び、農地で調査件数が増加しており、広範囲に近世から近代における粘土採掘坑が確認されている。地形的には、櫛井川左岸の低位段丘面上に立地するものと考えられる。



第23図 岡田遺跡99-3・4区、98-2・3区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 6・13)

現代の盛土(約80cm)の下層には、ケミコによる土壌改良を行ったと考えられる非常に固く締まった暗灰色砂質シルト(約20cm)、青灰色砂質シルト(約10cm)など同様の盛土が施されており、滋味土、床土はすでに失われていた。これらを除去すると、褐灰色砂質シルトを介在し、黄褐色粘性シルトの地山に至る。しかし、地山の黄褐色シルトは、トレンチ北から南に向かって緩やかに落ち込んでいるのが確認され、トレンチ南端では、褐灰色砂質シルト層は約30cmを測る。

遺構は、確認されなかった。遺物は、褐灰色砂質シルト層から中世の土師器片がわずかに出土したが図化できなかった。

第5節 99-4区の調査

1. 位置(第21・23図)

調査区は遺跡の北西端部に位置する。周辺は粘土の採掘等によってかなりの規模で削平されていることが近年の調査で判明している。地形分類上では洪積段丘低位面に立地している。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 6・13)

耕作土(約20cm)を除去すると、明褐色混じり灰色粘土の地山が露呈し、遺物包含層は全く確認できなかった。このことから、当調査区もすでに削平されていることが認められた。

第6節 98-1区の調査

1. 位置(第21・24図)

調査地は遺跡の北西縁部、地形分類上は、洪積段丘低位面に立地している。最近の調査例では、北方約150mの地点に97-8区^⑫が位置しており、氾濫原が確認されている。

トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 6・13)

約80cmの盛土を除くと、I層・床土層である灰褐色シルト(少量のマンガンを含む、約15cm)、以下

II層・黄褐色混じり灰色粘土(約20cm)、III層・淡黒褐色粘土(約10cm)、IV層・灰褐色砂質シルトと続



第24図 岡田遺跡98-1区地形図

き、地山である黄褐色粘質シルトに至る。地山面の標高は約8.10～8.30mを測る。いずれの層からも遺構、遺物は確認されなかった。

確認された層序のうち、Ⅲ層については周辺の調査ではあまりみられない土層であった。上層のⅡ層が広範に分布する中世の遺物包含層であることから、Ⅲ層については中世以前の堆積を示しており、今後の調査を待たなければならないが、遺跡内では未確認となっている中世以前の遺跡の展開を示唆するものとも考えられ、注目される。また地山のレベルが北西方向に若干下がっており、従来より指摘されている微地形^⑬の存在を確認することができた。榎井川左岸に複雑に入り込む谷地形の一端を示すものとも考えられる。

第7節 98—2区の調査

1. 位置（第21・23図）

調査区は市道中小路岡田線から約60m北東へ進んだ地点であり、99—3区や98—3区からは南西へ約100mの距離にある。地形分類上は低位段丘面上に立地している。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 6・14）

約60cm程の盛土を除去すると、Ⅰ層・現代の耕作土である灰黒色土（約20cm）が拡がっており、続いてⅡ層・暗橙色混じり淡灰褐色砂質土（約10cm）、Ⅲ層・暗黄褐色混じり灰褐色砂質土（約10cm）、Ⅳ層・暗灰褐色粘質土（約20cm）、Ⅴ層・橙色混じり灰褐色粘土（約5cm）、Ⅵ層・暗灰褐色シルト（約25cm）、Ⅶ層・淡灰褐色砂（約15cm）の各層がそれぞれ水平堆積をみせ、さらに地山である橙色混じり明灰褐色砂礫へと至る。このうちⅢ層からⅤ層については旧耕作土および床土層と捉えられるものであり、中から土師器の細片が出土し、過去の調査成果から考えて中世の包含層である可能性が高い。

また地山である明灰褐色砂礫層は低位段丘縁辺に拡がる氾濫原に属するものと考えられ、周辺に多く隠されている微地形の一端が確認されたといえよう。

第8節 98—3区の調査

1. 位置（第21・23図）

調査区は99—3区の北東約10m足らずの地点に位置している。地形分類上は低位段丘面上に立地しているものと考えられる。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 6・14）

確認された層位は非常に単純であり、厚さ約60cmの盛土を除去すると灰黒色混じり黄褐色粘土（約30cm）が拡がっており、直下に地山である橙色混じり明黄白色粘土が露呈する。灰黒色混じり黄褐色粘土については元来存在した耕作土と地山土との攪拌層であると考えられ、調査区全体がかなりの改変を受けているようである。近代の煉瓦生産に供した粘土採掘に係るものであろうか。

- 註
- ① 泉南市教育委員会『市道市場岡田線新設に伴う岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』(1995)
 - ② 泉南市教育委員会「岡田東遺跡91-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』(1993)
 - ③ 泉南市教育委員会「岡田遺跡90-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)
 - ④ ③と同じ。
 - ⑤ 泉南市教育委員会「岡田遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1997)
 - ⑥ 泉南市教育委員会「岡田遺跡94-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)
 - ⑦ 泉南市教育委員会「岡田遺跡97-1・2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1997)
 - ⑧ 泉南市教育委員会「岡田遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1994)
 - ⑨ 泉南市教育委員会「岡田遺跡96-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1997)・泉南市教育委員会「岡田遺跡97-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)など。
 - ⑩ ⑦と同じ。
 - ⑪ 1994年度、泉南市教育委員会の発掘調査による。
 - ⑫ 泉南市教育委員会「岡田遺跡97-8区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI』(1999)
 - ⑬ 泉南市教育委員会「まとめ」『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』(1995)

第8章 兎田遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL. 1・2、第25図）

兎田遺跡は檜井川の左岸、現在の兎田集落を中心に拡がる。遺跡の東側には檜井川が迫り、西側および南側は和泉山脈より派生する「檜井丘陵」によって限られている。地形分類上は沖積段丘面や氾濫原上に立地しているとされる。

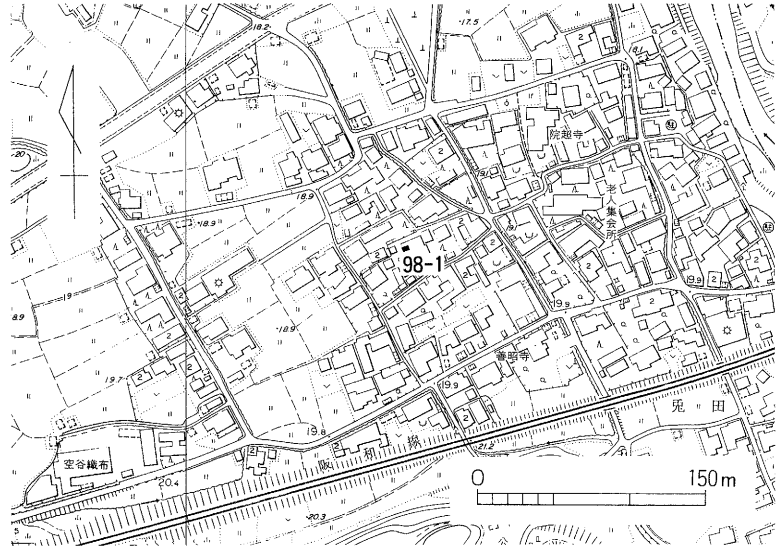
遺跡の周辺には先の丘陵上に築かれた新家古墳群や兎田古墳群をはじめとして、弥生時代の高地性集落と捉えられる新家オドリ山遺跡などが存在し、市域においても歴史的に特に注目される地域に属しているとい

えよう。そういった環境とは逆に、兎田遺跡の実態はそれほど明らかではない。近年の調査によって集落の初源が中世に遡ることが考えられるようになり、比較的広範にわたる整地業が行われていることなどが明らかとされているが、それら個々の成果を結ぶ時間軸についてはいまだ不分明であると言わざるを得ない。今後、周辺の遺跡の動向を踏まえた調査研究が期待されるものである。

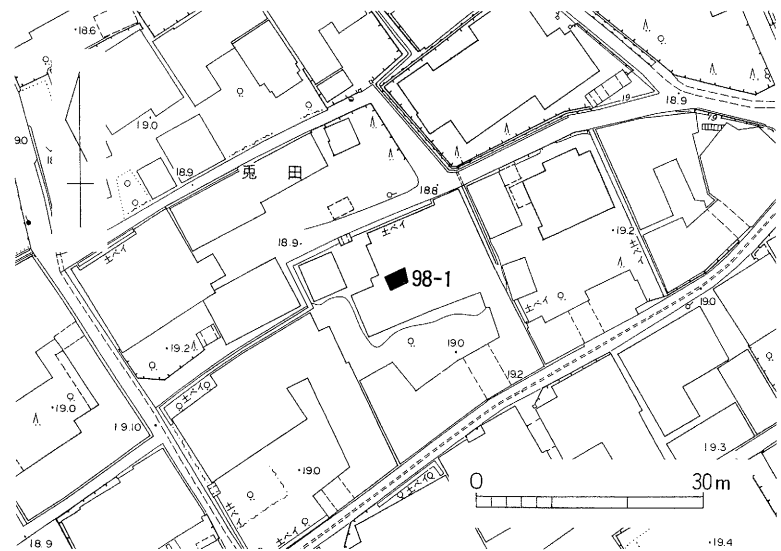
第2節 98-1区の調査

1. 位置（第25・26図）

調査区は遺跡の中央やや東寄りに位置し、現在の兎田集落のほぼ中央にあたる。周辺は遺跡内でも比較的調査例が多く、調査区の南側、道を隔てた地点には95-1区が位置し、また北東へ約50mの地点には96-1区が位置しており、それぞれ中世のピットや近世の雨落ち溝などが確認されている。地形分類上は沖積段丘に属すると考えられるが、近年の調査成果によって檜井川に起因する氾濫原が広範に分布することが明らか



第25図 兎田遺跡調査区位置図



第26図 兎田遺跡98-1区地形図

に成りつつあり、多くの微地形が隠されている可能性が高い。

調査区は既存建物が撤去され更地となっている。トレンチは1カ所設定した。

2. 層序と遺物の出土状況 (PL. 6・14)

確認された層位は基本的に8層ある。盛土、すなわち近代の整地層(約20~30cm)を除去すると、同じく整地層と捉えることのできる灰黄褐色土(約20cm)が若干北側に向けて傾斜しつつ堆積している。またトレンチの北半部ではこの層を切り込んで黄白色粘土(約15cm)がほぼ水平に堆積している。同層は非常に固く締まっており旧家屋の土間であった可能性が高い。続いて床土と捉えられる灰褐色混じり暗橙色土(約20cm)および旧耕作土と捉えられる淡灰褐色土(約20cm)がそれぞれ水平に堆積している。さらに淡暗黄褐色土(約40cm)が認められるが、この層は非常に均質なもので、中からは土師器の細片が出土した。基本的には以下に地山である暗褐色砂礫土が拡がっている。確認された地山の標高は18.0~18.1mを測り、東から西に向けて緩やかに傾斜している。またトレンチの北端では地山との間に淡灰白色砂質土(約15cm)が介在する。部分的にしか確認されていないため、詳細については明らかでないが、不安定な地所を整地する際に予め窪地を埋め立てたものであろうか。図化し得なかったが、土師器小皿の細片が出土している。いずれの層においても遺構は確認されなかったが、断面観察において灰褐色混じり暗橙色土の上面から長さ1.2m、深さ50cm程の掘り込みが2カ所認められた。埋土には近世~近代の瓦などが含まれており、家屋解体に伴う廃棄坑であると考えられる。

- 註 ① 泉南市教育委員会「兎田遺跡95-1・2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)
② 泉南市教育委員会「兎田遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)
③ 泉南市教育委員会「兎田遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)

第9章 まとめ

平成11年度の文化財保護法に基づいた埋蔵文化財包蔵地内における発掘届出および通知は、第1表に示したとおり平成11年1月1日から平成11年12月31日までで56件を数える。

この中で本書で報告する市内遺跡群各地において行われた個人住宅等に伴う発掘調査は、15件である。その内訳は、第2表に示したとおり、男里遺跡6件、岡中遺跡2件、北野遺跡2件、上村遺跡1件、岡田遺跡4件である。これらの調査面積は比較的小規模なものが多いが、個々の調査で得られた情報はそれぞれ大きな意味を持つものであることは言うまでもない。

なお、本書では前年度未報告分の男里遺跡2件(98-7・8区)、幡代遺跡1件(98-1区)、岡田遺跡3件(98-1～3区)、兎田遺跡1件(98-1区)も併せて報告している。以下、今年度得られた結果と過去のデータ等とを比較しながら、まとめと総括を行っていきたい。

男里遺跡は市域最大の規模を誇り、例年最も調査件数が多い遺跡である。しかしここ数年は市域全体の開発件数の減少に沿って、当遺跡における調査件数も減少傾向に転じてきたのも事実である。今年度は8件の調査について報告することができた。

99-1区は遺跡の中央に位置する双子下池の北西隅部に隣接した地点での調査であった。中世期の遺物包含層、さらに下層にも良好な遺物包含層を確認し、直下に広がる地山面において溝やピットなどの遺構が確認された。下層の包含層や遺構より出土した遺物はいずれも摩滅が激しく、明確な時期については判別しにくい。弥生時代末から庄内併行期にかけてのものであろう。過去に近接する地点で行われた数件の調査においては同時期の遺物包含層等はまったく確認されていないことから、今後どの様な展開をみせるかが非常に注目されるものである。

99-2区は遺跡の北西縁部、現在の男里川河岸近くでの調査であった。中近世の耕地化に伴う整地業が認められ、またそれらに先行するピットなどが確認され、土地利用の変遷を知る貴重なデータが得られた。

99-3区は遺跡南西部での調査であり、弥生時代中期の集落が確認された調査区^①と近接することから、非常に注目されたものであった。予想に違わず、大規模な自然流路が確認され、過去の成果を補足することができた。また流路埋土に含まれていた多量の弥生土器群は過去の調査で得られている資料とほぼ同一の内容であるといえるが、わずかに新しい様相を呈するものがあり、今後注意を要するものである。

99-4区も99-3区と同様、周辺の調査成果より弥生時代の遺構の拡がり期待されたものである。確認されたのは平安時代後期から鎌倉時代、室町時代にかけての多量の瓦を含む落ち込みであった。この落ち込みは整地業とも捉えられるものであり、瓦の出土状態からもこれらは二次的な移動を受けた後に、一括廃棄されたことが明らかである。直ちに寺院の所在を明らかにするのは難しいが、周辺に当該期の寺院が存在したことは疑いない。また出土した梵字紋軒丸瓦は市域出土のものの中でも古相を呈しており、注目されるものである。

99-5区は遺跡の南東部での調査である。周辺の調査では砂礫層の地山が確認されることが多く、比較的不安定な地形が指摘されていた地点である。調査の結果、中世に属する可能性の高い遺物包含層と安定した地山が確認された。遺構は確認されなかったが、中世の遺構の拡がりを知る新たな手掛かりが得られた。

99-6区は遺跡の北東部に位置し、近年盛んに開発が行われている地点である^②。過去の調査では当遺跡の拡がりを知るうえで重要な暗褐色または黒褐色粘土層の存在が指摘されてきたが、今回の調査によって、それら全てが一連のものではなく、当調査区のように遺構の埋土として捉えられるものの存在が確認された。今後、暗褐色系土層の分布を考えるうえで注意を要するであろう。今回遺構の性格は明らかにされなかったが、出土した遺物より13世紀から14世紀代の埋没が考えられるものであった。周辺では当該期の遺構や遺物はあまり確認されておらず、当遺跡の中世期の展開に新たな知見が得られた。

98-7区は現在の男里集落の北東端近くに位置する。周辺では余り見ない安定した地山面が存在し、多くの遺構が確認された。特に土坑については出土遺物が希薄であったため判然としないが、人頭大の自然礫を墓標とした土壙墓の可能性も考えられるものである。周辺の不安定な地山の状況から、あえて微高地状の高まりを意識して選地し、墓所としたものとも捉えられる。中世の墓制を知るうえで非常に貴重なデータが得られた。

98-8区では周辺の調査成果と同様、男里川に起因する氾濫原が確認され、従来のデータを補足することができた。またそういった不安定な荒蕪地を整地し、耕地化したことが確認された。特に注目されるのは、氾濫原を構成する砂礫層より弥生土器が出土したことで、周辺に拡がる氾濫原の形成時期を知る手掛かりが得られたと言えよう。

幡代遺跡では毎年数件ずつ調査が行われデータが蓄積されてきたが、今年度は調査が実施されず、昨年末報告の1件について報告するにとどまった。98-1区はあまり調査例のない遺跡の南西端での調査であった。調査の結果、複数時期の耕作面が確認され、現在へ踏襲される土地利用の在り方が明らかとなった。しかし確認された段の方向と合致する地割りは現在では認められず、いわゆる区画整理が実施された可能性がある。しかし当遺跡周辺には今も条里型地割りが多く残っており、区画整理が行われたとしても、その規模は比較的小規模なものであったであろう。今後周辺での調査が進めば段が埋没した時期や、その範囲が明らかになるものと期待される。

岡中遺跡では住宅建て替えなどに伴い、専ら現在の集落内を中心に調査が実施されてきた。しかし今年度実施された2件の調査はいずれも現在の集落の縁辺部に位置し、今まであまりデータが得られていない地点での調査であった。99-1区は現在の集落の西縁部での調査であった。氾濫原に近い様相を呈する地山が中世以降、安定する様子が窺え、周辺でも中世の遺構が確認される可能性が高くなった。

99-2区は遺跡の南西縁、金熊寺川に面した地点での調査であった。立地的な条件より不安定な地山が想像されたが、反して比較的安定した地山が確認されたことで、金熊寺川河岸周辺においても遺構や遺物包含層の拡がりに期待が持てることとなった。

北野遺跡は、過去に大規模な掘立柱建物が確認され、平安時代後期の有力な集団の存在が考えられており、また時代的にも周辺に立地する大苗代遺跡や海会寺跡などとの関連が注目される遺跡である。今日まで集中的に調査が行われることはなかったが、今年度は3件の調査が実施され、本書ではこのうち2件について報告している。99-1区は遺跡の中央付近での調査であった。遺構や遺物は確認されなかったが、安定した地山面が確認された。この地山は当調査区から北東へ約100mに位置する先の大型掘立柱建物が確認された調査区のものと同通することから、今後、当該期の遺構や遺物が周辺で確認される可能性は高いだろう。

99-2区は遺跡の南端での調査であった。ここでも安定した地山と、中世と捉えることのできる遺物包含層が確認されたことから、今後、遺構や遺物の確認される可能性は高いと言えよう。

上村遺跡は市域の東部、新家地区のほぼ中央に位置する遺跡である。分布調査によって周知されて以来、今回が初めての調査であり、遺跡の内容究明についての手掛かりが得られることが期待された。調査では現在の耕作土以下に複数の耕作面が確認され、直下には礫混じりの安定した地山が確認された。旧耕作土よりわずかに出土した遺物から中世の時期が与えられるものであった。新家地区に残る『日輪山清明寺代々記并三谷古記』から15世紀前半に本格的な開発が始まったとされる新家谷との関連が強く想定されるものである。^④

岡田遺跡は樫井川左岸に展開する同流域における代表的な遺跡である。市域では男里遺跡に次ぐ面積を有し、調査件数も着実に増加し、データの蓄積が進んできた。今年度は昨年度未報告分と併せて7件の調査について報告することができた。99-1区および99-2区は近年特に調査の多い遺跡の北端部での調査であった。結果、両調査区共に安定した地山面を確認し、中世に属する遺構を確認することができた。周辺では14世紀から15世紀にかけての多くの遺構や遺物が確認されており、当該期の集落が展開していたことが明らかである。今回得られた成果もこれらの中世集落を構成するものと評価できよう。99-3区および98-3区は同一区画内での調査であった。ともに現代の盛土から程なく地山に至るといった結果が得られた。遺跡の北西端部に位置する99-4区でも同様の結果が得られており、これらは近代に盛んに行われた煉瓦生産に伴って採掘された土採りの痕跡であろう。このような現象は今のところ岡田遺跡周辺にのみ確認され、どのような形態で煉瓦生産が行われたのかが注目されるものである。^⑤

98-1区は遺跡の北西縁部に位置する。中世の包含層と共に安定した地山面が確認された。注目されるのは中世の包含層である旧耕作土と地山との間に有機質の堆積層である淡黒褐色粘土層が確認されたことである。中世以前の堆積層であることは確実であり、今後遺跡の展開を知るうえで非常に重要なものとなる。

99-2区では99-3区や98-3区と比較的近距离にありながら、安定した地山は確認されず、氾濫原であることが確認され、周辺に多く隠されている微地形を復元するデータを得ることができた。

兎田遺跡は市域の東端、樫井川左岸に展開する遺跡である。数年に1件程度の割合で調査が実施され、昨年度実施の1件の調査について報告している。調査では氾濫原に属する地山の上に整地を施して耕地とし、さらに近世にいたってさらに整地をしていることが確認され、土地利用の変遷を知るデータを得ることができた。

以上、足早に各々の調査において得られた成果についてまとめを行ってきた。毎年のように、また異口同音で繰り返されることだが、それぞれの調査は「点」でしかなく、自ずと得られる情報にも限りがあるように思える。しかしこれら地道な「点」を連ねることによって、「点」が「線」へ、「線」が「面」を構成するように、やがて豊穡な歴史的情景が復元されるものと信じている。

註 ① 1983年度、大阪府教育委員会、1993年度、財団法人大阪府埋蔵文化財協会、1995～96年度、財団法人大阪府文化財調査研究センターの発掘調査による。

② 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIV』（1997）

③ 泉南市教育委員会「北野遺跡」『泉南市文化財年報 No.1』（1995）

④ 泉南市史編纂委員会「第三章 戦国時代の泉南地方」『泉南市史-通史編-』（1987）

⑤ 泉南市教育委員会「岡田遺跡97-1・2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XV』（1998）

第5表 文化財一覧表

1	正法寺跡	47	野々宮遺跡	93	樫井城跡	139	引谷池窯跡	185	林昌寺瓦窯跡
2	小垣内遺跡	48	総福寺天満宮本殿	94	奥家住宅	140	兎田遺跡	186	林昌寺銅鐸出土地
3	大谷池遺跡	49	宮ノ前遺跡	95	道ノ池遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	187	岡中遺跡
4	大久保B遺跡	50	垣外遺跡	96	岡ノ崎遺跡	142	フキアゲ山1号墳	188	高田山古墳群
5	下高田遺跡	51	屯田遺跡	97	中菖蒲遺跡	143	フキアゲ山2号墳	190	岡中西遺跡
6	紺屋遺跡	52	八王子遺跡	98	岸ノ下遺跡	144	兎田古墳群	190	雨山南遺跡
7	口無池遺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	99	諸日遺跡	145	池尻遺跡	191	福島遺跡
8	東門寺跡	54	日根神社遺跡	100	城ノ塚古墳	146	中の川遺跡	192	尾崎海岸遺跡
9	降井家屋敷跡	55	西ノ上遺跡	101	禪興寺跡	147	岩の前遺跡	193	馬川北遺跡
10	大久保C遺跡	56	川原遺跡	102	ダイジョウウ寺跡	148	別所北遺跡	194	馬川遺跡
11	中家住宅	57	母山遺跡	103	上之郷遺跡	149	別所遺跡	195	下出北遺跡
12	大久保A遺跡	58	母山近世墓地	104	向井代遺跡	150	高野遺跡	196	室堂遺跡
13	五門北古墳	59	向井山遺跡	105	意賀美神社本殿	151	昭和池遺跡	197	平野寺(長楽寺)跡
14	五門遺跡	60	鏡塚古墳	106	向井池遺跡	152	上村遺跡	198	向出遺跡
15	五門古墳	61	梨谷遺跡	107	三軒屋遺跡	153	狐池遺跡	199	高田西遺跡
16	大浦中世墓地	62	笹ノ山遺跡	108	川原遺跡	154	上野中道遺跡	200	向山遺跡
17	大浦遺跡	63	土丸遺跡	109	岡田東遺跡	155	宮遺跡	201	高田南遺跡
18	甲田家住宅	64	土丸南遺跡	110	岡田遺跡	156	宮南遺跡	202	和泉鳥取遺跡
19	久保B遺跡	65	雨山城跡	111	氏の松遺跡	157	芋掘遺跡	203	雨山遺跡
20	鳥羽殿城跡	66	土丸城跡	112	座頭池遺跡	158	石ヶ原遺跡	204	内畑遺跡
21	墓の谷遺跡	67	下大木遺跡	113	岡田西遺跡	159	高倉山南遺跡	205	皿田池古墳
22	来迎寺本堂	68	大木遺跡	114	新伝寺遺跡	160	本田池遺跡	206	正方寺遺跡
23	池ノ谷遺跡	69	稲倉池北方遺跡	115	中小路北遺跡	161	上代石塚遺跡	207	西畑遺跡
24	成合寺遺跡	70	大西遺跡	116	中小路西遺跡	162	信之池遺跡	208	自然田遺跡
25	山ノ下城跡	71	松原遺跡	117	中小路遺跡	163	滑瀬遺跡	209	玉田山遺跡
26	山出遺跡	72	中開遺跡	118	坊主池遺跡	164	六尾遺跡	210	玉田山古墳群
27	上瓦屋遺跡	73	末廣遺跡	119	中小路南遺跡	165	六尾南遺跡	211	玉田山須恵器窯跡
28	湊遺跡	74	安松遺跡	120	北野遺跡	166	金熊寺遺跡	212	寺田山遺跡
29	壇波羅密寺跡	75	長滝遺跡	121	一岡神社遺跡	167	専徳寺遺跡	213	黒田西遺跡
30	壇波羅遺跡	76	植田池遺跡	122	海会寺跡	168	天神ノ森遺跡	214	鳥取北遺跡
31	佐野王子跡	77	郷ノ芝遺跡	123	海会寺瓦窯	169	キレット遺跡	215	鳥取遺跡
32	上町東遺跡	78	日根野遺跡	124	大苗代遺跡	170	高田遺跡	216	鳥取南遺跡
33	市場東遺跡	79	机場遺跡	125	仏性寺跡	171	男里北遺跡	217	黒田南遺跡
34	若宮遺跡	80	棚原遺跡	126	海宮宮池遺跡	172	戎畑遺跡	218	神光寺(蓮池)遺跡
35	上町遺跡	81	羽倉崎東遺跡	127	市場遺跡	173	男里遺跡	219	三味谷遺跡
36	俵屋遺跡	82	羽倉崎遺跡	128	向井山遺跡	174	光平寺跡	220	三升五合山遺跡
37	北尻遺跡	83	嘉祥神社本殿	129	新家遺跡	175	光平寺石造五輪塔	221	小口谷遺跡
38	岡口遺跡	84	道ノ池遺跡	130	下村遺跡	176	樽井南遺跡	222	井関遺跡
39	中嶋遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	131	下村北遺跡	177	男里東遺跡	223	石田山遺跡
40	小塚遺跡	86	船岡山遺跡	132	下村1号墳	178	長山遺跡	224	西鳥取遺跡
41	十二谷遺跡	87	岡本廃寺	133	新家オドリ山東遺跡	179	山ノ宮遺跡	225	戎遺跡
42	丁田遺跡	88	田尻遺跡	134	新家オドリ山遺跡	180	前田池遺跡	226	貝掛遺跡
43	新池尻遺跡	89	船岡山南遺跡	135	下村2号墳	181	幡代遺跡	227	金剛寺遺跡
44	大坪遺跡	90	夫婦池遺跡	136	新家古墳群	182	幡代南遺跡	228	塚谷古墳群
45	市堂遺跡	91	樫井西遺跡	137	新家オドリ山南遺跡	183	奥ノ池遺跡		
46	北ノ前遺跡	92	藤波遺跡	138	フキアゲ山西遺跡	184	林昌寺跡		

SENNANSHI-ISEKIGUN-HAKKUTUTYŌSA-HOUKOKUSHYO XVIII

SENNANSHI-BUNKA ZAI-TYŌSA-HOUKOKUSHYO VOL.33

A Report on Archaeological Research at Sennnan City in 1999

C o n t e n t s

Preface

Chapter 1	Prosess of Research Work	1
2	Research of ONOSATO site	6
3	Research of HATASHIRO site	20
4	Research of OKANAKA site	22
5	Research of KITANO site	25
6	Research of KAMIMURA site	28
7	Research of OKADA site	30
8	Research of USAIDA site	36
9	Conclusion	38

Abstract of Report

Plates

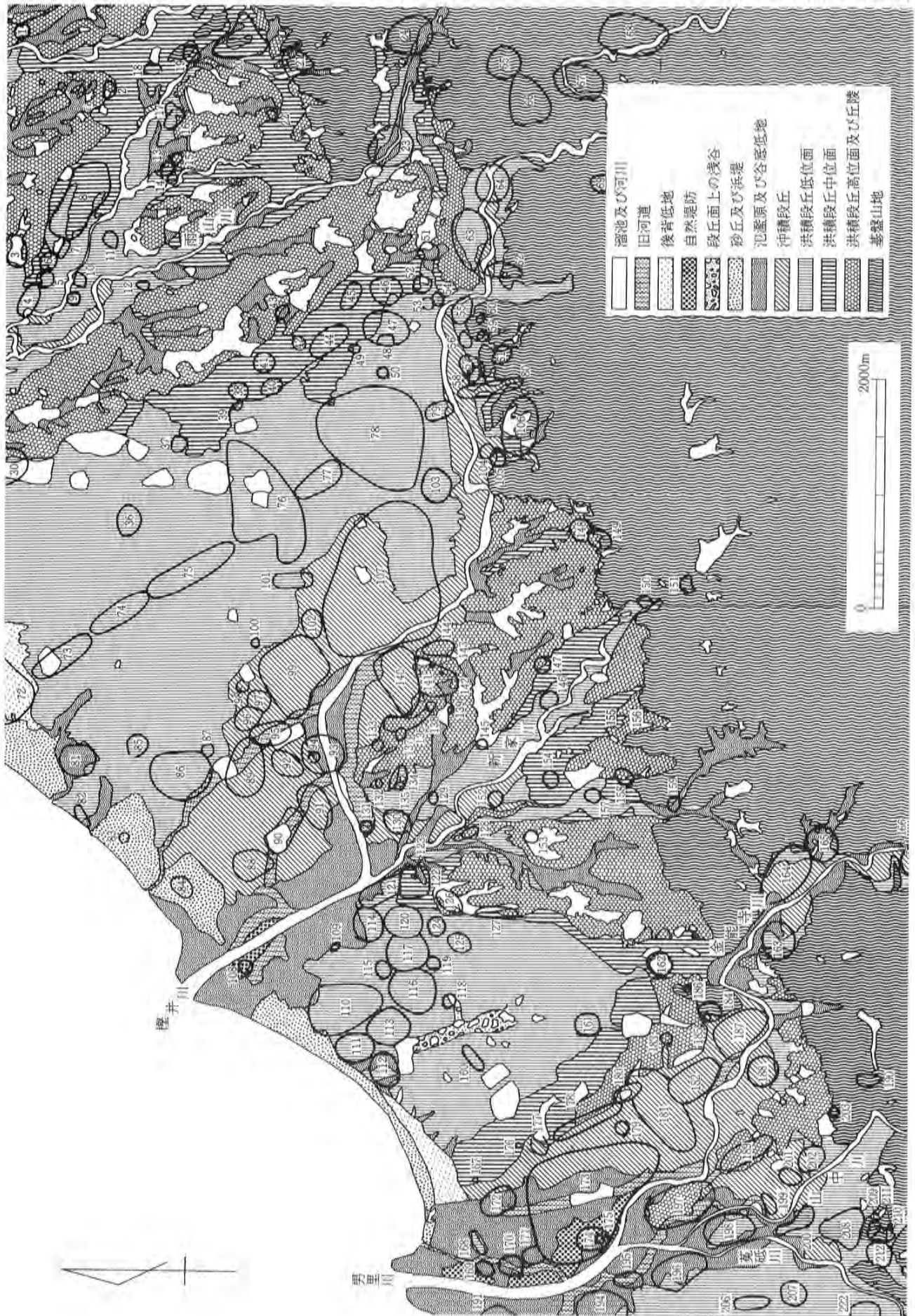
S e n n a n M u n i c i p a l B o a r d o f E d u c a t i o n ,

O s a k a , J a p a n .

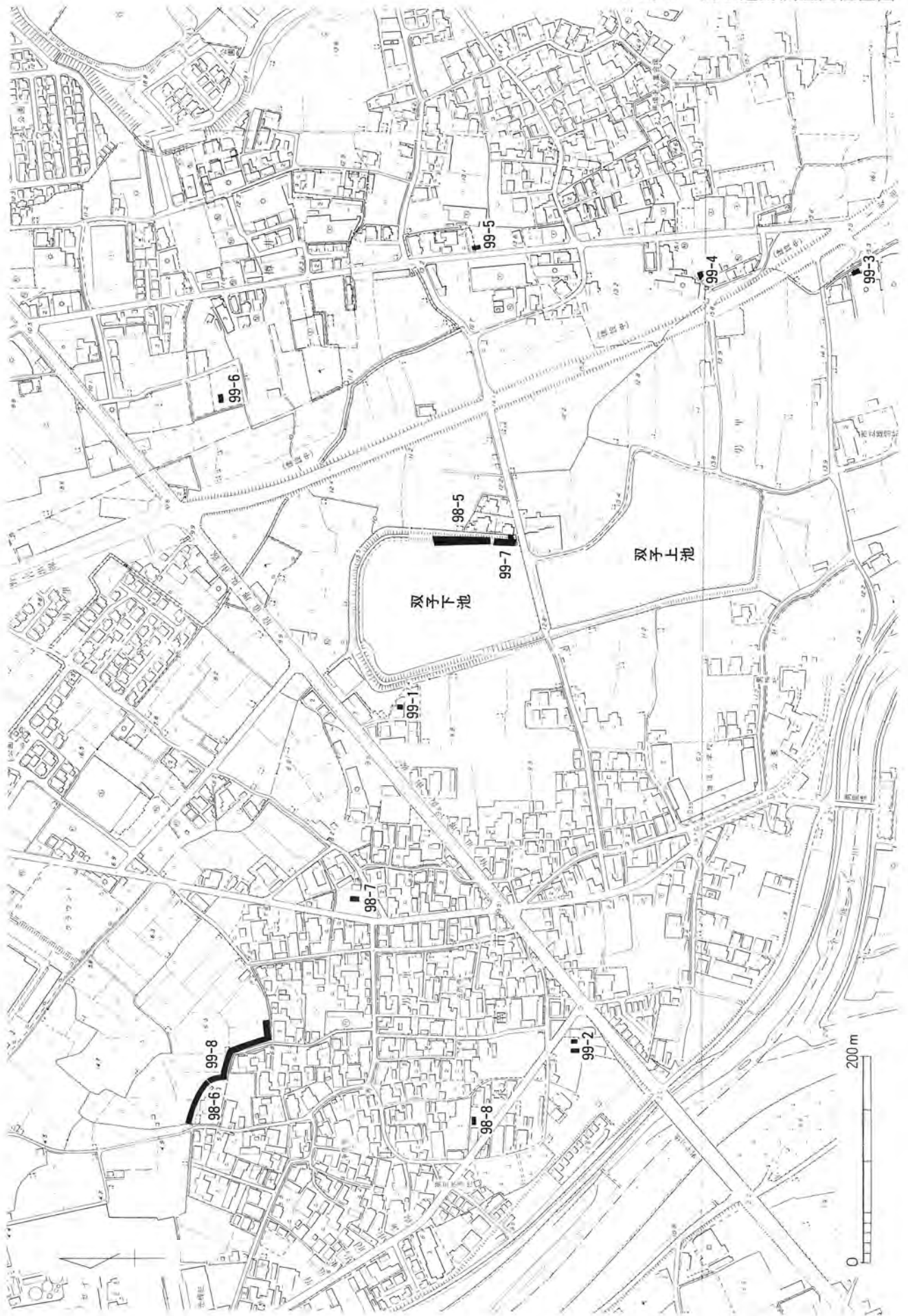
MARCH, 2 0 0 0

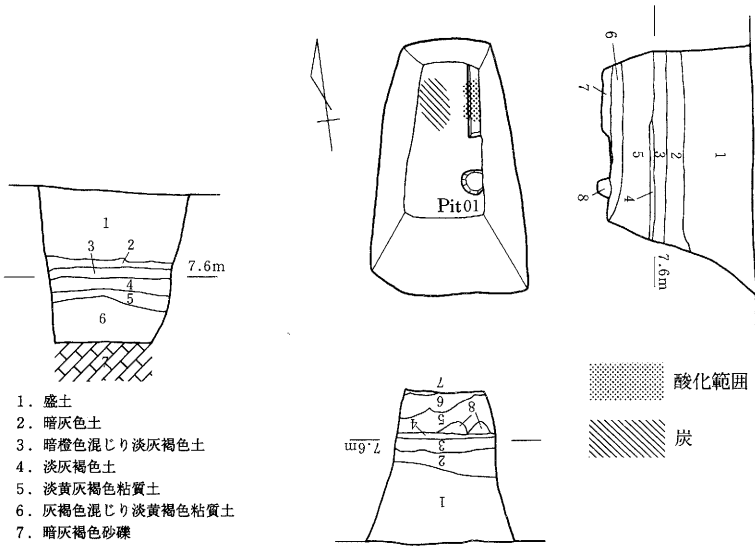
圖 版





PL. 3 男里遺跡調査区位置図



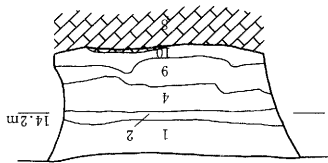
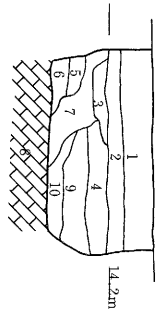
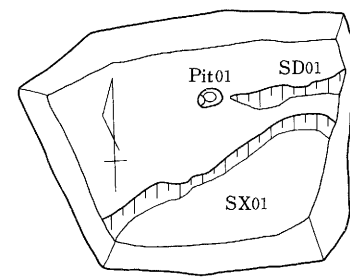
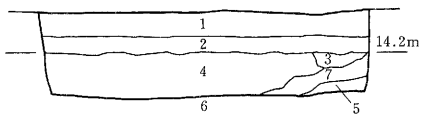


1. 盛土
2. 暗灰色土
3. 暗橙色混じり淡灰褐色土
4. 淡灰褐色土
5. 淡黄灰褐色粘質土
6. 灰褐色混じり淡黄褐色粘質土
7. 暗灰褐色砂礫

ON99-2区第2トレンチ南壁断面図

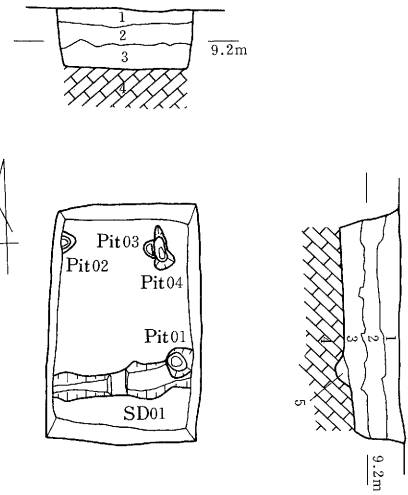
1. 盛土
2. 暗灰色土
3. 暗橙色混じり淡灰褐色土
4. 淡灰褐色混じり暗褐色土
5. 淡黄灰褐色粘質土
6. 灰褐色混じり淡黄褐色粘質土
7. 淡黄褐色粘質土
8. 淡暗褐色土 (Pit01)
9. 淡灰褐色土

ON99-2区第1トレンチ平面図及び断面図



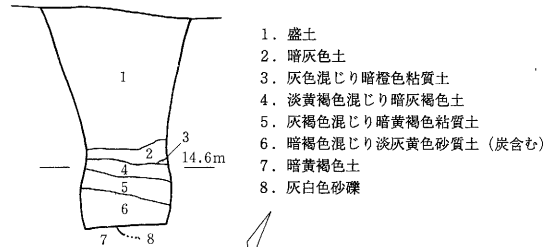
1. 盛土
2. 淡灰黑色土
3. 灰褐色土
4. 淡黄灰褐色砂質土
5. 灰褐色粘質土
6. 黄褐色粘質土
7. 暗灰褐色シルト
8. 淡黄褐色砂礫土
9. 淡暗褐色礫含土
10. 淡暗褐色粘質土

ON99-4区平面図及び断面図

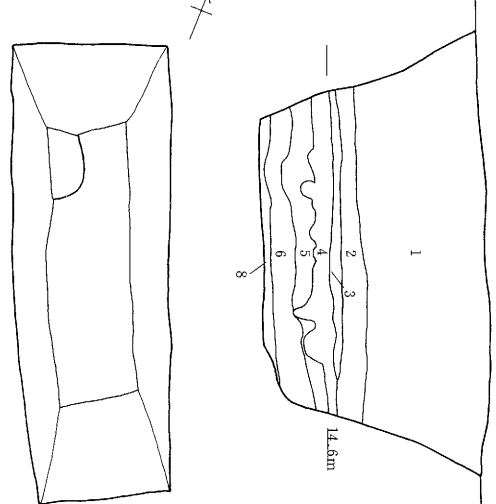


1. 橙色混じり明灰褐色土
2. 暗褐色混じり淡灰褐色土
3. 暗褐色粘質土
4. 暗黄褐色粘質土
5. 暗褐色粘質土 (SD01)

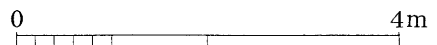
ON99-1区平面図及び断面図



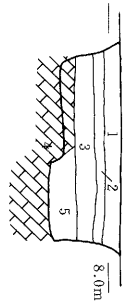
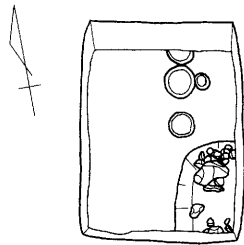
1. 盛土
2. 暗灰色土
3. 灰色混じり暗橙色粘質土
4. 淡黄褐色混じり暗灰褐色土
5. 灰褐色混じり暗黄褐色粘質土
6. 暗褐色混じり淡灰黄色砂質土 (炭含む)
7. 暗黄褐色土
8. 灰白色砂礫



ON99-3区平面図及び断面図

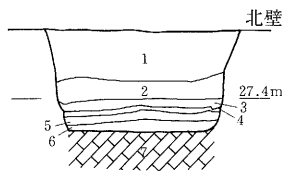
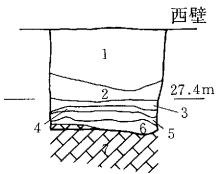


PL.5 男里遺跡②・幡代遺跡・岡中遺跡・北野遺跡・上村遺跡調査区



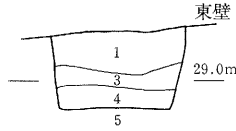
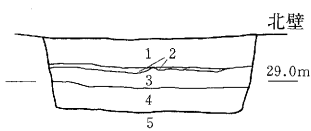
1. 灰黒色土
2. 淡灰色土
3. 褐色混じり暗灰色土
4. 灰色混じり暗黄褐色土
5. 褐色混じり灰色土

ON98-7区平面図及び断面図



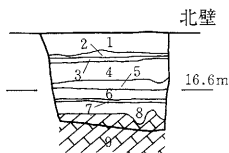
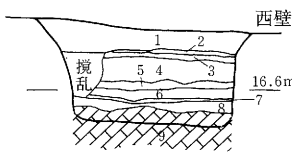
ON99-1区断面図

1. 盛土
2. 灰黒色土
3. 灰褐色シルト
4. 淡灰色シルト
5. 茶褐色シルト
6. 淡褐色砂質シルト
7. 灰褐色砂質シルト



OK99-2区断面図

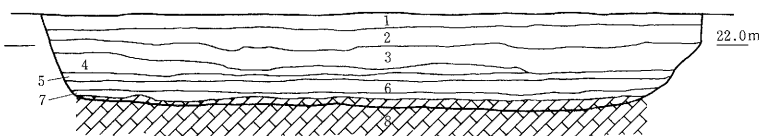
1. 明褐色土
2. 暗赤褐色土
3. 暗黄褐色土
4. 暗褐色礫混じり土
5. 暗褐色土



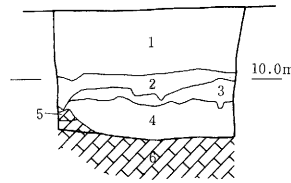
KT99-2区平面図

1. 盛土
2. 灰色シルト
3. 橙色シルト
4. 淡灰褐色砂質シルト
5. 淡褐色砂質シルト (マンガン粒含む)
6. 灰褐色砂質シルト
7. 褐色粘質シルト
8. 茶褐色粘質シルト
9. 淡黄褐色粘質シルト

KM99-1区第1トレンチ東壁断面図

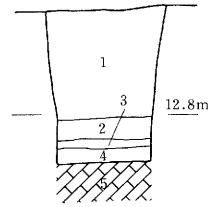


1. 黒灰色土
2. 明黄褐色砂質シルト
3. 灰褐色砂質シルト
4. 灰褐色粘質シルト
5. 褐色粘質シルト
6. 褐色白色粘質シルト
7. 黄褐色粘質シルト
8. 明褐色粘質シルト



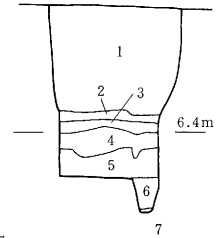
1. 盛土
2. 淡灰色混じり灰黒色土
3. 暗褐色混じり淡灰褐色土
4. 暗褐色粘質土
5. 淡暗灰褐色砂質土
6. 淡黄褐色粘質土

ON99-6区南壁断面図



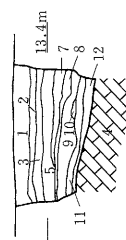
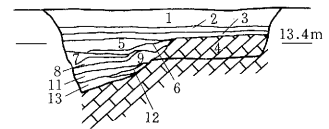
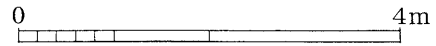
1. 盛土
2. 暗灰色土
3. 灰色混じり褐色土
4. 暗褐色土
5. 褐色土

ON99-5区北壁断面図



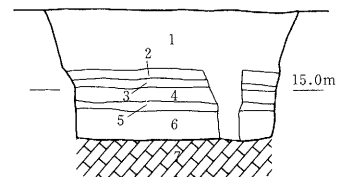
1. 盛土
2. 灰褐色シルト
3. 橙色混じり淡灰褐色土
4. 暗褐色混じり淡灰褐色砂質土
5. 暗褐色混じり暗黄灰褐色粘質土
6. 灰褐色砂礫土
7. 明灰褐色砂

ON98-8区北壁断面図



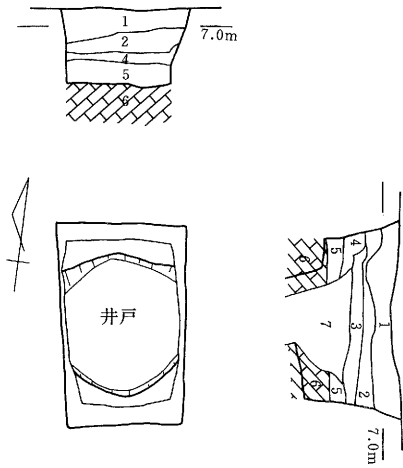
1. 暗灰色土
2. 明橙色混じり淡灰褐色土
3. 橙色混じり淡灰褐色土
4. 淡黄褐色砂質土
5. 淡灰褐色土 (旧耕作土)
6. 淡黄褐色混じり淡灰褐色砂質土
7. 灰褐色シルト (マンガン粒含む、旧耕作土)
8. 橙色混じり淡黄褐色砂質土
9. 褐色混じり暗灰褐色シルト (旧耕作土)
10. 灰白色粘土
11. 暗灰褐色シルト (旧耕作土)
12. 橙色混じり灰褐色粘土
13. 灰褐色混じり黄褐色粘質土

HT98-1区平面図及び断面図



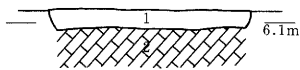
1. 盛土
2. 暗灰色土
3. 淡灰色土
4. 黄褐色混じり淡灰色土
5. 灰色混じり明黄褐色土
6. 灰色混じり茶褐色土
7. 暗黄褐色粘質土

KT99-1区北壁断面図



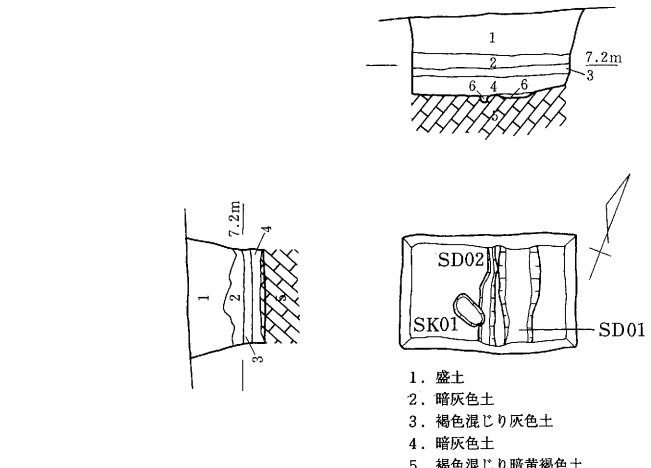
1. 盛土
2. 暗灰黑色土
3. 明茶褐色混じり灰色土
4. 灰色混じり明黄褐色土
5. 灰色混じり暗茶褐色土
6. 明褐色粘質土
7. 灰色砂質土

OKD99-2区平面図及び断面図



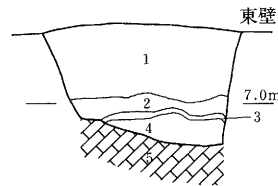
1. 淡灰色土
2. 明褐色混じり灰色粘土

OKD99-4区北壁断面図



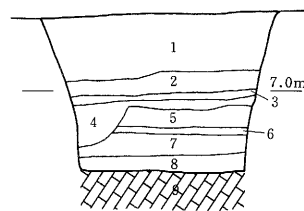
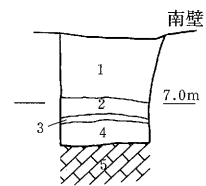
1. 盛土
2. 暗灰色土
3. 褐色混じり灰色土
4. 暗灰色土
5. 褐色混じり暗黄褐色土
6. 灰色土

OKD99-1区平面図及び断面図



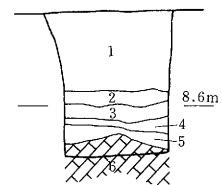
1. 盛土
2. 暗灰色砂質シルト
3. 青灰色砂質シルト
4. 褐灰色砂質シルト
5. 黄褐色粘性シルト

OKD99-3区断面図



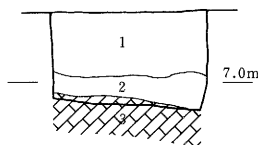
1. 盛土
2. 灰黑色土
3. 暗橙色混じり淡灰褐色砂質土
4. 暗黄褐色混じり灰褐色砂質土
5. 暗灰褐色粘質土
6. 橙色混じり灰褐色粘土
7. 暗灰褐色シルト
8. 淡灰褐色砂
9. 橙色混じり明灰褐色砂礫

OKD98-2区東壁断面図



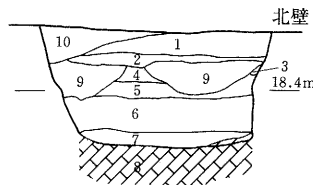
1. 盛土
2. 灰褐色シルト (マンガン粒含む)
3. 黄褐色混じり粘土
4. 淡黒褐色粘土
5. 灰褐色砂質シルト
6. 黄褐色粘質シルト

OKD98-1区東壁断面図



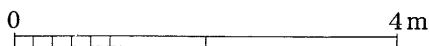
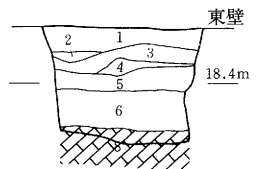
1. 盛土
2. 灰黑色混じり黄褐色粘土
3. 橙色混じり明黄白色粘土

OKD98-3区北壁断面図



1. 盛土
2. 黄白色粘土
3. 灰黄褐色土 (炭含む)
4. 灰褐色混じり暗橙色土
5. 淡灰褐色土 (炭含む)
6. 淡暗黄褐色土 (炭含む)
7. 淡灰白色砂質土
8. 暗褐色砂礫土
9. 黄褐色混じり淡灰褐色土
10. 暗褐色礫合土

US98-1区断面図





99-1区
(北から)



99-2区第1トレンチ
(南から)



99-2区第2トレンチ
(南から)



99-3区
(南から)



99-4区
(西から)



99-5区
(南から)



99-6区
(北西から)



98-7区
(北から)



同上
(西から)



ON98-8区
(南から)



HT98-1区
(東から)



OK99-1区
(東から)



OK99-2区
(西から)



KT99-1区
(南東から)



KT99-2区
(南東から)



KM99-1区
(南から)



OKD99-1区
(西から)



OKD99-2区
(南西から)



99-3区
(西から)



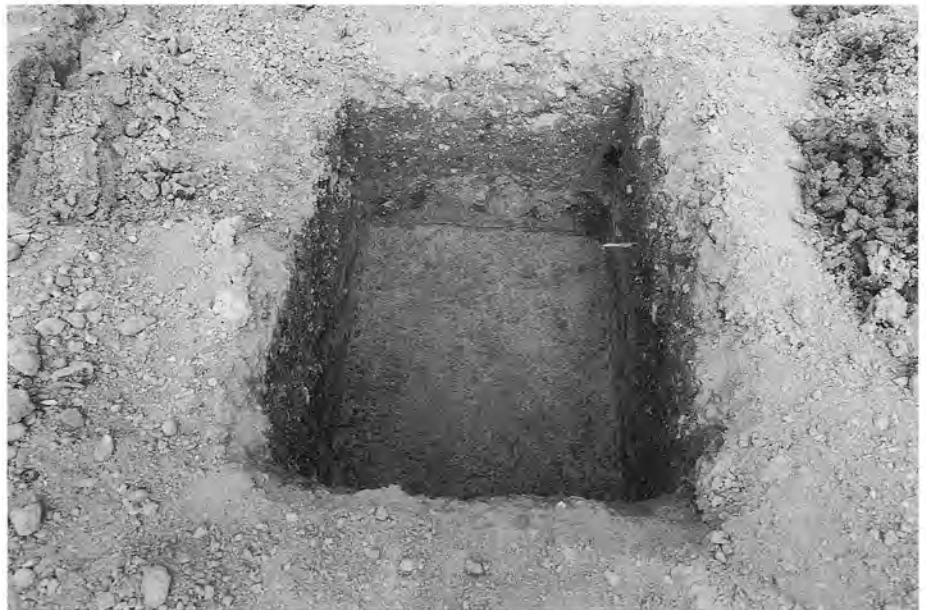
99-4区
(北西から)



98-1区
(西から)



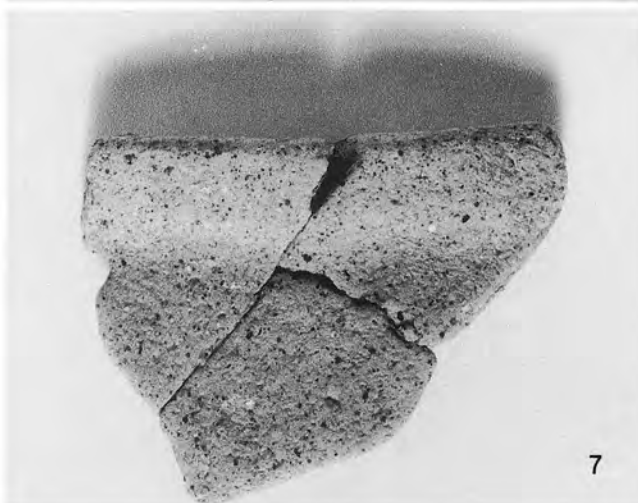
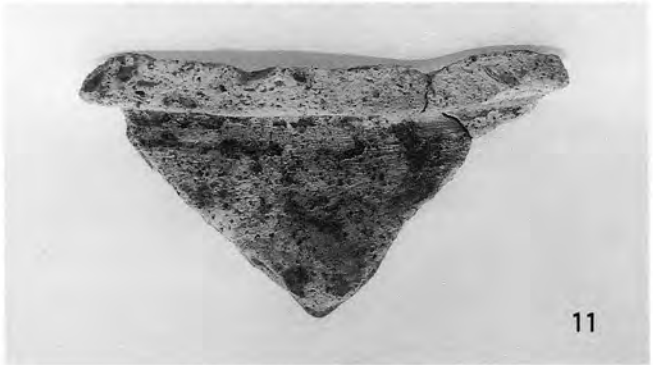
OKD98-2区
(南から)

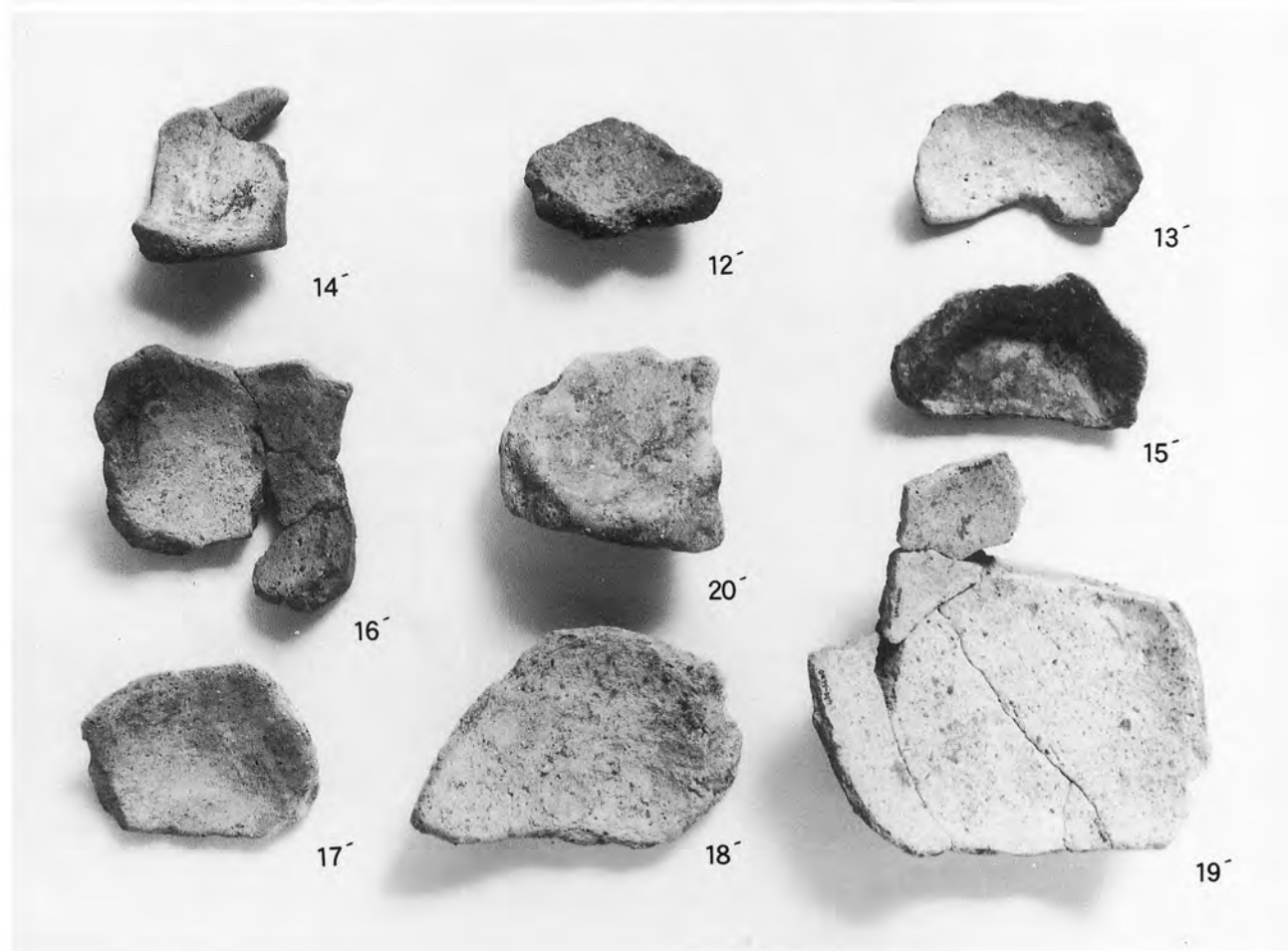
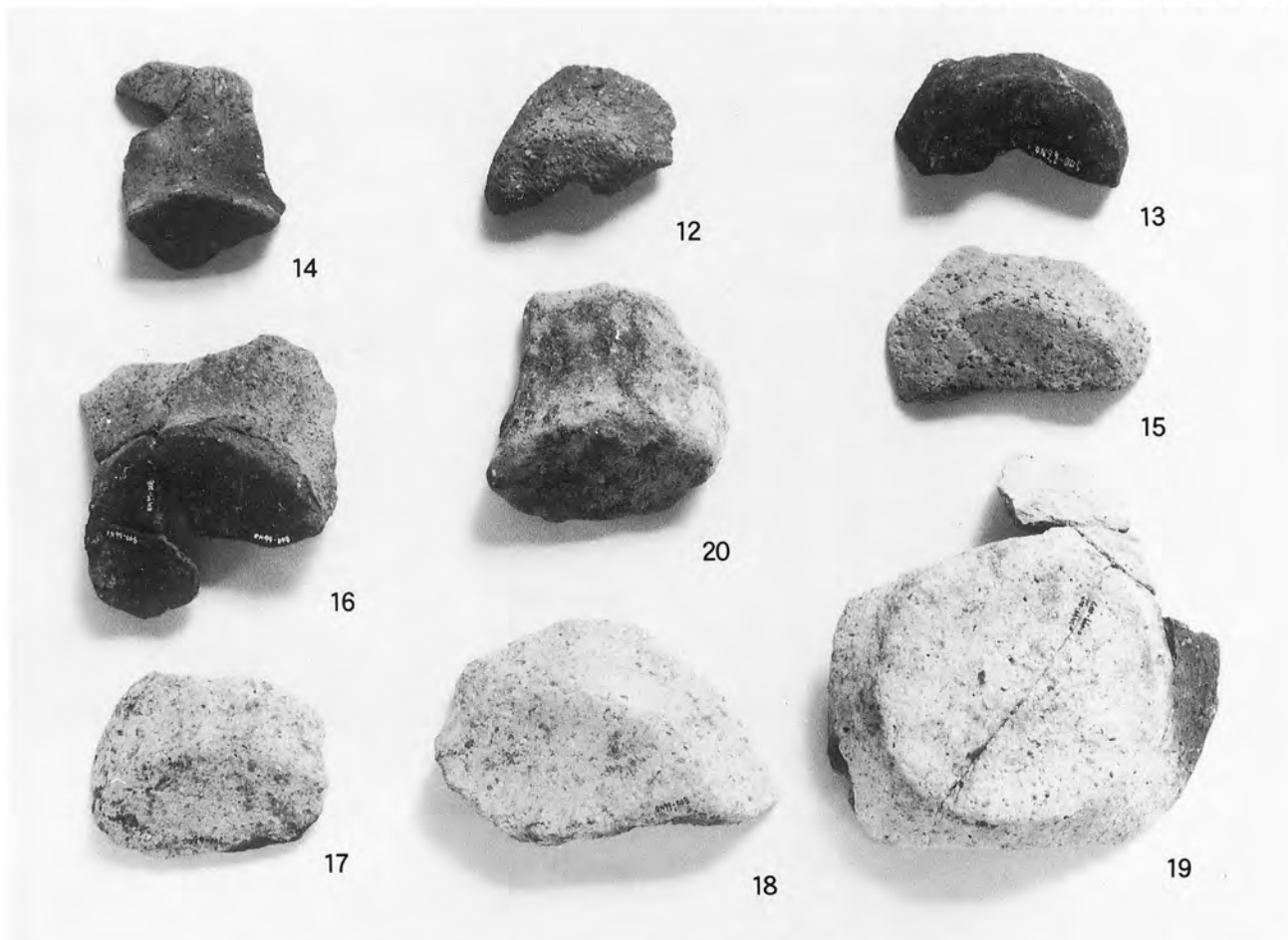


OKD98-3区
(南から)

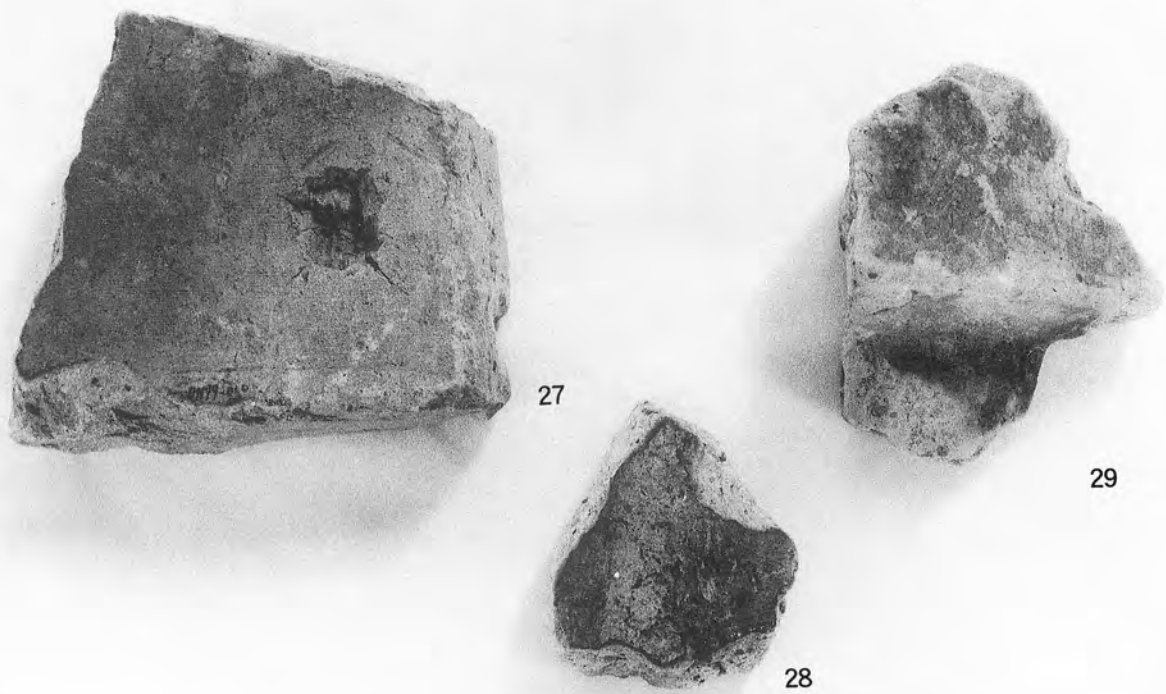
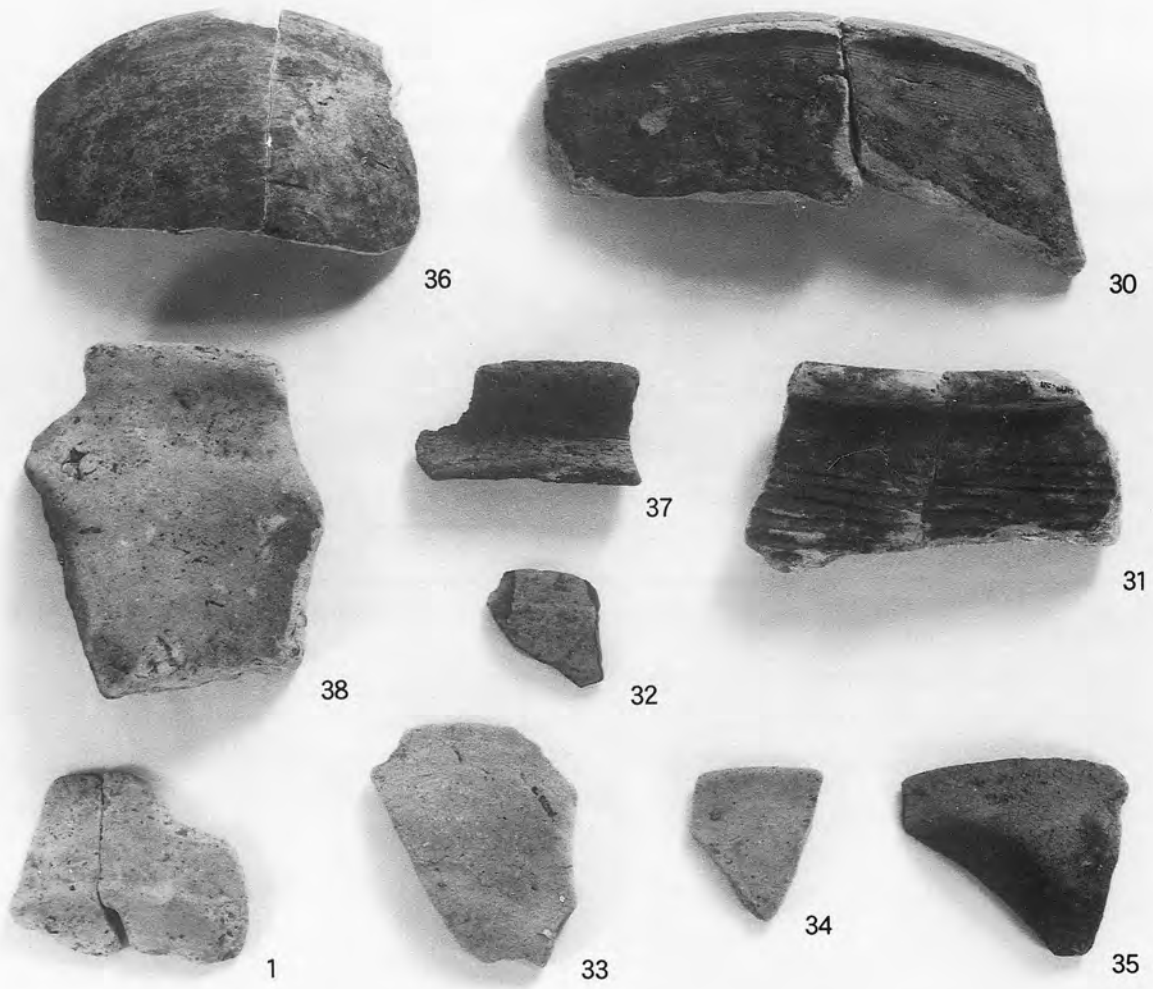


US98-1区
(南東から)









報告書抄録

ふりがな	せんなんしいせきぐんはつちよきさほにくよ							
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書							
副書名	—							
巻次	XVII							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第三十三集							
編著者名	仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡一彦・城野博文・河田泰之・大野路彦							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590-0592 大阪府泉南市樽井一丁目1番1号 TEL.0724 (83) 0001							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさと 男里遺跡	大阪府泉南市 男里	27228	ON	34度 21分 30秒	135度 15分 40秒	99-1 199909 99-2 199910 99-3 199907 99-4 199904 99-5 199910 99-6 199804 98-7 199901 98-8 199901	4 7 8 8 2 6 3 4	住宅新築 宅地造成 工場及び住居 長屋住宅 長屋住宅 住宅新築 住宅新築 住宅新築
はたしろ 幡代遺跡	大阪府泉南市 幡代	27228	HT	34度 21分 09秒	135度 15分 18秒	98-1 199902	4	農業用倉庫
おかなか 岡中遺跡	大阪府泉南市 岡中	27228	OK	34度 20分 51秒	135度 16分 38秒	99-1 199908 99-2 199907	3 4	住宅新築 住宅新築
きたの 北野遺跡	大阪府泉南市 信達大苗代	27228	KT	34度 22分 22秒	135度 17分 15秒	99-1 199906 99-2 199910	4 4	住宅新築 住宅新築
かみむら 上村遺跡	大阪府泉南市 新家	27228	KM	34度 21分 57秒	135度 17分 58秒	98-1 199912	27	分譲住宅
おかだ 岡田遺跡	大阪府泉南市 岡田	27228	OKD	34度 22分 39秒	135度 16分 45秒	99-1 199911 99-2 199905 99-3 199905 99-4 199909 98-1 199901 98-2 199903 98-3 199903	3 4 4 3 4 4 4	住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築
うらいだ 兔田遺跡	大阪府泉南市 兔田	27228	US	34度 22分 25秒	135度 18分 38秒	98-1 199903	5	住宅新築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男里遺跡 99-1 99-2 99-3 99-4 99-5 99-6 98-7 98-8	集落 集落 集落 集落 集落 集落	弥生～古墳 中世 弥生 平安～中世 不明 中世 中世 不明	溝、ピットなど ピットなど 流路 落ち込みなど 土坑、ピット	弥生土器、石器 弥生土器 瓦、土器 土師器、瓦器 黒色土器 弥生土器？	集落範囲の拡大 流路規模の拡大 集落範囲の拡大 土堀墓？
幡代遺跡 98-1	生産	近世	耕作に伴う段		
岡中遺跡 99-1 99-2		中世 中世		土師器、瓦器	安定した地山面を確認 安定した地山面を確認
北野遺跡 99-1 99-2		不明 不明		土師器 土師器、須恵器	安定した地山面を確認 安定した地山面を確認
上村遺跡 98-1	生産	中世～近代		土師器、瓦器	初の本格的な調査
岡田遺跡 99-1 99-2 99-3 99-4 98-1 98-2 98-3	集落 集落	中世 中世 近代 近代 ～中世 中世 近代	溝、ピット 井戸	瓦 瓦 土師器 土師器	集落範囲の拡大 集落範囲の拡大 粘土採掘 粘土採掘 中世以前の堆積を確認 粘土採掘
兎田遺跡 98-1	集落	中世～近世		土師器	複数の整地業を確認

泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII

泉南市文化財調査報告書 第33集

2000年3月31日

編集 大阪府泉南市教育委員会
発行 泉南市樽井1丁目1番1号

TEL 0724-83-0001

印刷 小笠原印刷株式会社

